

ISSN : 1346-0676

# The Japan Branch Bulletin

The Dickens Fellowship

XXXIV



ディケンズ・フェロウシップ日本支部  
年報 第34号



ディケンズ・フェロウシップ日本支部

# 年 報

第 34 号



*The Japan Branch Bulletin*  
The Dickens Fellowship

XXXIV

2011

***The Japan Branch Bulletin  
of the Dickens Fellowship***

No. 34

ISSN : 1346-0676

Edited by Eiichi Hara and Yuji Miyamaru

*Editorial Board*

Eiichi Hara	Ryota Kanayama	Takashi Nakamura
Toru Sasaki	Akiko Takei	Takanobu Tanaka
Masayuki Toga	Shiro Yamamoto	

Typeset by Yuji Miyamaru

Published annually by the Japan Branch of the Dickens Fellowship  
Graduate School of Letters,  
Kyoto University  
Yoshida Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan  
<http://www.dickens.jp/>

©2011 The Japan Branch of the Dickens Fellowship



## 目次



### 巻頭言

支部長就任にあたって.....	佐々木 徹	1
任期を終えて .....	原 英一	2

### 書 評

チャールズ・ディケンズ (著), 梅宮創造 (訳) 『ディケンズ公開朗読台本』 .....	松本 靖彦	3
島田桂子 (著) 『ディケンズ文学の闇と光』.....	宮川 和子	7
Takashi Terauchi, <i>Charles Dickens: His Last 13 Years</i> .....	松村 豊子	10
Lillian Nayder, <i>The Other Dickens: A Life of Catherine Hogarth</i> .....	中田 元子	12
John R. Reed, <i>Dickens's Hyperrealism</i> .....	猪熊 恵子	19
John Gordon, <i>Sensation and Sublimation in Charles Dickens</i> .....	渡部 智也	24
Ina Zweiniger-Bargielowska, <i>Managing the Body: Beauty, Health, and Fitness in Britain, 1880-1939</i> .....	川崎 明子	29
金山亮太『サヴォイ・オペラへの招待 ——サムライ、ゲイシャを生んだもの』.....	新井 潤美	33
山本史郎『名作文学を読み直す』.....	宇佐見 太一	36
松村昌家『文豪たちの情と性へのまなざし』.....	梅 正行	42

### Fellowship's Miscellany

Dickens, Racism, and Chauvinistic Madness .....	Mitsuharu Matsuoka	45
ディケンズ作品 20 冊, 三回目読了雑感.....	清水 英秋	52
2010 年度 秋季総会 .....		57
2011 年度 春季大会 .....		64
ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約.....		70
『年報』への投稿について.....		72
フェロウシップ会員の執筆業績 (2010 ~ 2011) .....		73
お問い合わせ先.....		79
役員一覧.....		79
編集後記.....		80



Pip taking leave of Joe  
Illustration by Marcus Stone

## CONTENTS

**Editorial**

Greetings from the New President and Secretary .....	Toru Sasaki	1
After Six Years .....	Eiichi Hara	2

**Reviews**

Charles Dickens, trans. by Sozo Umemiya, <i>Charles Dickens: Public Readings</i> .....	Yasuhiko Matsumoto	3
Keiko Shimada, <i>Darkness and Light in Dickens's Works</i> .....	Kazuko Miyagawa	7
Takashi Terauchi, <i>Charles Dickens: His Last 13 Years</i> .....	Toyoko Matsumura	10
Lillian Nayder, <i>The Other Dickens: A Life of Catherine Hogarth</i> .....	Motoko Nakada	12
John R. Reed, <i>Dickens's Hyperrealism</i> .....	Keiko Inokuma	19
John Gordon, <i>Sensation and Sublimation in Charles Dickens</i> .....	Tomoya Watanabe	24
Ina Zweniger-Bargielowska, <i>Managing the Body: Beauty, Health, and Fitness in Britain, 1880-1939</i> .....	Akiko Kawasaki	29
Ryota Kanayama, <i>Invitation to the Savoy Opera</i> .....	Megumi Arai	33
Shiro Yamamoto, <i>Re-reading the English Masterpieces</i> .....	Taichi Usami	36
Masaie Matsumura, <i>Passions and Sexuality as Literary Concern to Shoyo, Soseki, and Tanizaki: Vein of English Literature in the Three Masters</i> .....	Masayuki Toga	42

**Fellowship's Miscellany**

Dickens, Racism, and Chauvinistic Madness .....	Mitsuharu Matsuoka	45
After Reading Twenty Volumes of Dickens' Works for the Third Time .....	Hideaki Shimizu	52

<b>Annual General Meeting of the Japan Branch 2010</b> .....	57
--------------------------------------------------------------	----

<b>The Japan Branch Spring Conference 2011</b> .....	64
------------------------------------------------------	----

Rules, Japan Branch of the Dickens Fellowship .....	70
-----------------------------------------------------	----

Publications by Members of the Japan Branch, 2010–2011 .....	73
--------------------------------------------------------------	----





ディケンズ・フェロウシップ日本支部 (2010-2011)

2010 年度総会

日時：2010 年 10 月 23 日 (土)

会場：東京女子大学 24 号館 3 階 24301 教室

プログラム

開会・議事 (13:20 ~ 14:00)

開会の辞 日本支部長 原英一 (東京女子大学教授)

議事 日本支部長 原英一 (東京女子大学教授)

研究発表 第 1 部 (14:10 ~ 15:30) 司会 松本靖彦 (東京理科大学准教授)

福島佳子 (関西学院大学大学院修士課程) 「*A Christmas Carol* における「光」と「闇」

若澤佑典 (東京大学大学院修士課程) 「ディケンズ作品における中国」

研究発表 第 2 部 (15:45 ~ 17:15) 司会 玉井史絵 (同志社大学教授)

木島菜葉子 (京都大学大学院博士課程) 「ディケンズとラスキン—風景が意味するもの」

小宮彩加 (明治大学准教授) 「Soyer's Symposium」

閉会 (17:30)

懇親会 (18:00 ~) 会場: 吉祥寺第一ホテル

2011 年度春季大会

日時：2011 年 6 月 4 日 (土)

会場：神戸女学院大学 エミリー・ブラウン記念館 2 階 202 号室

開会 (13:30 ~ 13:40)

日本支部長挨拶・報告 原英一 (東京女子大学教授)

特別講演 (13:45 ~ 15:15) 司会 佐々木徹 (京都大学教授)

講師 Dr John Drew (The University of Buckingham) 「Charles Dickens's Weekly Magazine (1850-70) and the "Business of Leisure"」

ディケンズ長編全訳刊行記念講演 (15:30 ~ 16:10) 司会 溝口薫 (神戸女学院大学教授)

講師 田辺洋子 (広島経済大学教授) 「翻訳をめぐる」

特別公演 ディケンズ作品朗読 (16:20 ~ 17:30) 司会 梅宮創造 (早稲田大学教授)

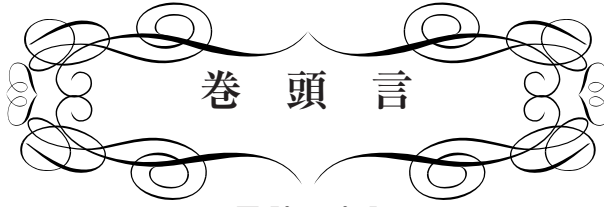
出演 佐藤昇 (俳優・グローブ文芸朗読会主宰) 「ドクター・マリゴールド」

閉会 (17:40)

懇親会 (18:00 ~ 20:00) 会場: 愛蓮門戸店 (阪急今津線門戸厄神駅前)







## Editorial

### 支部長就任にあたって

Greetings from the New President and Secretary

日本支部長 佐々木 徹

Toru Sasaki, President and Secretary of the Japan Branch



僕がフェロウシップに入ったのは1993年（それまではもっぱらハーディに入れ込んでいたので、ディケンズに目覚めるのが遅れたのです）、当時の支部長は小池滋先生でした。最初に参加したのは新潟大学で行われた大会で、「程度は高いし、おもしろい集まりやな」という第一印象はまだ鮮明に頭に残っています。あれからいつの間にか20年近い時が経とうとしていますが、その間小池先生をはじめ、西條先生、原先生と、日本支部のために惜しみない尽力をされる姿を目にしてきた者としては、後を襲うのはたいへんな重責だと感じざるを得ません。しかし弱音は吐かず、ディケンズ・フェロウシップ日本支部がいつまでも「程度の高い、おもしろい集まり」であり続けられるように、なんとか頑張りたいと思います。とはいえ、一人ではできることには限界があります。皆様、何卒暖かいご協力を賜りますよう、この場を借りてお願い申し上げます。

## 任期を終えて

After Six Years

原 英一

Eiichi Hara

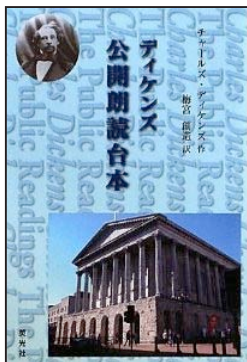
瞬く間に過ぎ去った6年間でした。この間、いろいろなことがありました。一身上のことでディケンズと多少とも関係のある最も大きな出来事は、2009年に、60年間住み慣れた仙台を離れ、東京に出たことでした。新しい勤務先の東京女子大学は、かつて小池滋先生がおられたところで、ディケンズ・フェロウシップ日本支部の事務局が置かれていました。約10年ぶりに事務局が戻ったことになり、大変感慨深いものがありました。

1970年、ディケンズ没後100年の年に、当時出ていた『英語研究』（研究社）という雑誌のディケンズ没後100年記念臨時増刊号に、小池先生と川本静子先生が対談をしています。写真も載っていますが、今見ると、当然ながら、お二人とも大変若く、しかも情熱にあふれています。ディケンズを読み始めたばかりの学生だった私には、まぶしかったものでした。その年「ディケンズ・フェロウシップ東京支部」が創設されました。私が会員になったのはいつだったのか、もう覚えていないのですが、就職して間もない頃だったでしょうか。1982年の秋季総会で、私の大学の大先輩である間二郎先生のお誘いで、シンポジウムに講師として参加させていただいたのが、フェロウシップの集まりに出た最初の経験でした。

支部長という大役を何とか終えることができましたが、もちろん、これは財務理事の中村隆さんをはじめとして、理事や会員の皆様に支えていただいたおかげです。2012年はディケンズ生誕200年という記念の年。世界的なディケンズ研究者である佐々木徹さんを新支部長に迎えて、日本支部は万全の体制となりました。

最近では、一般のディケンズ愛好者の方が入会される例が増えて、大変嬉しく思っています。ディケンズを愛する人々がますます多く日本支部に集まることを願っています。

書 評  
REVIEWS



チャールズ・ディケンズ (著)  
梅宮創造 (訳), 『ディケンズ公開朗読台本』  
Charles DICKENS, *Charles Dickens: Public Readings*,  
trans. by Sozo UMEMIYA  
(274 頁, 英光社, 2010 年 9 月, 本体価格 2,600 円)  
ISBN: 9784870971387

(評) 松本靖彦  
Yasuhiko MATSUMOTO

ディケンズはもっと声に出して読まれるべきだ —  
そして、もっと聞かれるべきだ。そう改めて確信されたのは、昨年 (2010 年) 師走に東京杉並の衍芸館で催された「グローブ文芸朗読会」で、佐藤昇氏をはじめとする 6 人の役者さんたちによる『クリスマス・キャロル』の朗読を耳にしたときだった。台本 (公開朗読用台本ではなく小池滋訳を適宜短くしたもの) を手にした読み手たちが、めまぐるしく互いの立ち位置を入れ替えながら台詞と語りを交し合う、緊迫感のある朗読劇だった。

これは深い作品理解に裏打ちされ、緩急と明暗の対照がみごとな、実に質の高い朗読で、演出にも演技にも 2010 年 12 月現在の「今・ここ」でディケンズ作品に体当たりしてやろうという気概と新鮮味が感じられた。ほぼ時を同じくして聞いた BBC Radio7 のラジオドラマ『クリスマス・キャロル』(Michael Gough や Freddie Jones が出演している 2009 年版) よりもはるかに優れた内容だった。原作をしっかりと咀嚼しつつも「今・ここ」での「リアルな」表現を追求したこの公演は、朗読がディケンズのテキストに文字通り息を吹き込む様を目の当たりにさせてくれた。『クリスマス・キャロル』の魅力は独りで黙読していてもわからないのではないかと感じたほどだった。

この優れた「グローブ文芸朗読会」を軌道にのせた立て役者が、日本におけるディケンズ公開朗読研究の第一人者であるだけでなく、自ら長きにわたってディケンズ作品の朗読を実践してこられた荒井良雄氏であり、近年公開朗読台

本の精力的な翻訳によって、この朗読会を含めたディケンズ作品の朗読活動を牽引してこられたのが、その成果の一部を本書『ディケンズ公開朗読台本』という形にまとめられた梅宮創造氏である。

『ディケンズ公開朗読台本』には「ナンシー撲殺」, 「バーボックス商会」, 「ドクター・マリゴールド」, 「デヴィッド・コパフィールド」, 「ピクウィック裁判」, 「炉端のこおろぎ」の公開朗読台本6篇が収められている。台本集ではあるが、もちろん読み物のアンソロジー、つまりは短編小説集としても楽しめる本であり、日本語で味わえるディケンズ節の世界の幅を<sup>ぶし</sup>上げた意義は大きい。とりわけ「バーボックス商会」と「炉端のこおろぎ」の読みやすい日本語訳が入手可能になったことに快哉を叫びたい。「ディケンズは『クリスマス・キャロル』を翻訳で読んだだけですが、あれは面白かった。ディケンズっていいですね！」などと言ってくる奇特な人々——確かに実在する！——に上述の2篇のクリスマス物を収めた本書を『クリスマス・キャロル』が大好きなら、こういうお話はどうでしょう？」と紹介できるようになったからである。

また、本書の巻頭を飾る「ディケンズと公開朗読」という梅宮氏の論考も重要である。末尾の「主要参考文献リスト」も含めて、ディケンズの公開朗読に関する基本的情報をひととおり提供してくれる有益な資料になっているだけでなく、訳者の梅宮氏をディケンズ公開朗読の研究と朗読台本の翻訳へと駆りたててきたある疑問が吐露されているからである。それは、ディケンズはなぜ身を削り、命を削るようにしてまで自作の朗読にのめりこんだのか、という多くのディケンジアンが共有している問いである。「あとがき」によれば、梅宮氏はこの問いに対してある仮説をたてていて、その仮説を実証するための作業がディケンズ公開朗読台本の翻訳なのだという。果たしてその仮説が実証されたのかどうか梅宮氏は本書中でははっきりとは述べておられないが、ある程度の手ごたえは得られているものと思われる。

このように単独でも有用な本書ではあるが、梅宮氏の『ディケンズ公開朗読台本』に関して何より重要なことは、これがあくまで「朗読台本集」であり、これ一冊で自己完結してしまうのではなく、広く一般読者に向けて、また今後のディケンズ鑑賞・研究に向けて「開かれた」本であるということだ。このことを2つの点から指摘したい。

まず、本書は「日本でも朗読を通じてもっと多くの人にディケンズを楽しんでもらいたい」という意図から荒井良雄氏が始められた「日本（語）ディケンズ朗読計画」とでも呼ぶべき大きな文芸プロジェクトの一環として捉える必要がある。良い朗読のためにはまず良い台本がなければならず、荒井氏の主導のもと日本語でのディケンズ朗読台本作りが地道に続けられてきた。声に出し

て読まれ、聞かれることを目的とした翻訳の作成である。その成果の1つが2006年に出た『ディケンズ朗読短篇選集』（小池滋編著、北星堂）であり、新たな成果が梅宮氏による本書である。ディケンズが遺した全21篇の朗読台本の完訳を目指したこの翻訳作業は続行中であるし、本書も梅宮氏が翻訳した朗読台本のすべてを取めているわけではない。上述の朗読プロジェクトの中での位置づけからしても、梅宮氏の功績の全体から見ても、本書はそれらのごく一部を伝えているにすぎないのである。この本一冊でも楽しめるが、あくまで部分であり完結してはいない。上述した「仮説」に対して梅宮氏が決定的な結論を下していないのはそのせいかもしれない。

また、台本であるからには、本書は公演の場で分かち合われるべき筋のものであり、読み手によって適宜改変を加えられながら活用されていくものであり、閉じたテキストとして扱われるべきではない。本書に収められた台本はいずれも佐藤氏によって朗読にかけられたものばかりであり、その読みやすさは既に検証済みである。こなれた訳文だが、読み手や聞き手によっては、これでもまだ分かりにくいと感じる箇所があるかもしれない。たとえば、ある朗読会の打ち上げの席上、その日佐藤氏が朗読された梅宮訳「バーボックス商会」中の「妄念」（92頁）という訳語について、聴衆の中にいた役者さんたちが梅宮氏ご本人に手厳しい意見をぶつけているのを目撃したことがある。書き言葉は字面が見えるので、黙読するには妥当な表現でも、耳で聞くとすると意外な違和感を生じることがあるのが朗読台本の難しさであろう。また、「デヴィッド・コパフィールド」でペゴティおじさんが姪のエミリーについて語る台詞の「うちのエミリーってのはね……家んなかにきらきら輝く小さな目がなきゃ、どうにもならんちゅう、まったくそういうやつでして」（139-40頁）という箇所も、このままでは理解しにくいと思われる。このような場合、元の英語表現から多少離れた訳をしても構わないのではなからうか。

確かに、原文への忠実さをとるか、耳で聞いたときの分かりやすさをとるか、判断が難しい局面もあったと思われる。本書では「もっと思い切って原文への忠誠をかなぐり捨て、大胆な意識をした方が分かりやすいのではないか」と評者が愚考する箇所でも、梅宮氏は比較的原文に忠実な訳を試みておられる。これは、後々朗読者が適宜本書の台本に自由な改変を加えて読むのを許すにしても、まずは Philip Collins 編の *Charles Dickens: The Public Readings* に収められた21篇のテキストに匹敵する、ディケンズ公開朗読台本の日本語版定本を拵えておきたいという梅宮氏の気概の表れであろう。

その一方で、梅宮訳独自の工夫とアレンジも散見する。たとえば、「ドクター・マリゴールド」に出てくる大男ピックルソンが歌う戯れ唄 ‘Shivery Shakey,

ain't it cold?」を梅宮氏は「おお寒、こ寒、しばれるね」(115頁)と訳されているが、評者の私見ではこれに優る訳はない。また、「バーボックス商会」を原文で読むと、幼いポリーがませた口調で中年男のジャクソンを翻弄している印象が強いが、梅宮訳は「ちゅがう！そんなじゃなァい」(85頁)のように彼女の幼さを取えて訳文自体に埋め込んだ。結果としてポリーのあどけなさが強調されるが、同時にそのあどけなさにはだされるジャクソンの姿も鮮明になる。これはテキストに盛り込まれた演出といってもよいだろうが、佐藤氏の朗読では大きな効果を上げていた。

台本に限らず、英語の語りを日本語に移そうという翻訳者は、まず適当な文体(口調)の選択を迫られることになるだろうが、この点で興味深かったのが「炉端のこおろぎ」の文体である。梅宮氏は本書所収の6篇のうち「家庭のおとぎ話」である「炉端のこおろぎ」だけは「です、ます」調で訳し、そこに時折「……ですな」という口調を加えて訳文に独自のリズムを生み出そうと工夫されている。これは、梅宮氏が朗読者の佐藤昇氏とタッグを組んで翻訳をしてこられたことと関係があるかもしれないが、評者としてはこの一篇くらいはそのまま女性のナレーターが読んでもいいように、より中性的な口調にとどめておいてもよかったのではないかと思う。

なぜこういうことを言うのかというと、評者は本書をはじめとしたディケンズの日本語朗読台本が、いずれ佐藤氏を含めたいろんな役者さんたちの朗読でCD化され、少なくとも『クリスマス・キャロル』くらいは毎年師走に(たとえば)NHK ラジオドラマとして放送される、というような状況を想像しているからである(個人的に「炉端のこおろぎ」を読んで欲しいと思う女優さんの名前は複数挙げるができる)。しかし、朗読は何といっても生が良いので、さまざまな形の朗読会(ディケンズ+和物の朗読、あるいは講談や落語と組み合わせたってよいではないか)が開かれ、ディケンズが読まれる機会がもっと増えるとよいと思う。ディケンズ作品の朗読は研究者たちにも多くの発見をもたらすはずだ。日本におけるディケンズの朗読プロジェクトは、まさにこれからが本番、これからが進化のしどころなのである。本書がその中核となることは間違いない。





島田桂子、『ディケンズ文学の闇と光』

Keiko SHIMADA, *Darkness and Light in Dickens' Works*

(161 頁, 彩流社, 2010 年 8 月, 本体価格 2,100 円)

ISBN: 9784779115486

(評) 宮川和子

Kazuko MIYAGAWA

モラルとは後天的に得られるものであろうか、それとも生まれつき人間に内在するものであろうか。怒りや悲しみ、同情といった感情はモラルと結びつくのであろうか。宗教とモラルはどのように関係するのであろうか。島田桂子氏の『ディケンズ文学の闇と光』はこうした諸問題について考える好機をわたしに与えてくれた。序で氏は「モラリストとしてのディケンズではなく、芸術家としてのディケンズを支える信仰について」追求し、「キリスト教作家」としてのディケンズを捉えるという目的を明らかにしている。モラリストの側面を排除したディケンズ芸術、モラルから切り離れたキリスト教とは一体どのようなものなのであろうか。

本書の内容に入る前に、まずモラリストとしてのディケンズについて今一度確認しておきたい。ディケンズはよく「センチメンタル」な作家と言われ、いわゆる「知識人」たちから軽蔑的に扱われる傾向がある。しかしながら、カプラン (Fred Kaplan) は『聖なる涙』(Sacred Tears, 1987) で、ディケンズの「感傷」が、人間に内在するモラルと深く結びついていることを指摘し、「センチメンタリズム」の道徳的効用を論じている。ディケンズは、社会の底辺で搾取されている貧民たちを描き出し、読者の心の中にある「同情心」「悲嘆」「怒り」といった純粋な感情を引き起こすことで、社会制度改革を促進したのである。では、このモラルは宗教とどういう関係にあるだろうか。布教活動という名目のもとに植民地支配を押し進めてきた大英帝国の歴史、現代ではテロリズムへの報復に「聖戦」という言葉を使い、中東国の罪のない人々を大量殺戮した米国元大統領、そしてローマ教皇の児童虐待のスキャンダルといった現象を思いおこすとき、制度的な宗教が必ずしもモラルとは両立しえないと考えざるを得ない。ディケンズが作品の中で、制度と結びついた宗教の偽善性を暴き教会や聖職者を風刺したのも、彼がモラルを重視する作家であったことの証明であろう。

本書では、こうした制度としてのキリスト教とは別に、精神的な信仰そのものをディケンズ作品の中に純粋に追求しようと試みる。氏は、制度を超えた壮



大な宇宙的枠組みの中で神と信仰の問題を徹底的に論じ、救いや赦し、そして復活といったテーマをディケンズ作品に見出している。

それでは本書の内容を順番に検討したいと思う。まず第一章「チャールズ・ディケンズーアンビヴァレントな人間像」では、ディケンズの宗教的背景と悪人を描くことへの執念について論じている。クイルプやクルック、フェイギンといった悪人が悲惨な最期を迎えるプロットについては「必ず悪は滅び、善が勝利する」という旧約聖書のエホバのような厳しさを見ている。一方で、サイクスによるナンシー殺害シーンでは血の描写を通じ、罪の深さと悪の恐ろしさを表現し、ディケンズが読者に教訓を与えているとする。

第二章以降、氏は具体的な作品分析に入り、「善と悪の対立」では『ピクウィック・クラブ』、『オリヴァー・トウイスト』、『骨董屋』を論じている。ピクウィックの物語に「自分が賢いものだとうぬぼれてはならない。誰に対しても悪をもって悪にむくはず、すべての人に対して善を図りなさい」という新約聖書の言葉が、メッセージとして隠されているのだと指摘し、聖書とディケンズとのインターテクスト的關係を指摘している。第三章「ヴィクトリア朝のバビロン」では『デイヴィッド・コパーフィールド』を論じ、アグネスとステイアフォースが「善き天使」と「悪しき天使」として、さらにカンタベリーとロンドンに「エルサレム」と「バビロン」のように神聖な地と墮落の地として対照的に描かれていることを指摘している。デイヴィッドがステイアフォースによって墮落の世界へと引きずり込まれずに、人生の荒波を乗り越え、泳ぎきることができたのは、アグネスという安全網があったからであると論じ、「罪を犯す者たちの転倒した無秩序が神の摂理を損なうことはできなかった」という真実が描かれているのだとする。

さて、第四章「ディケンズによる罪と罰」では『荒涼館』『リトル・ドリット』分析に入る。『荒涼館』分析ではジョーの死の場面への言及がある。「ジョーの死は、あらゆる人間の無責任と利己主義による犠牲の象徴」と論じ、すべての人間が大法官裁判所だけではなく、「人間よりも大いなるかたの手による」審判の前に立たされているとする。さらに氏は『リトル・ドリット』論で、エイミーとクレナム夫人の和解の場面に言及し、罪の告白とその赦しを通じて、新しい自分が生まれるという解釈を与えている。

最後に、第五章「回心と赦しへの希望」では『二都物語』と『われらの共通の友』が取り上げられている。ディケンズの『二都物語』執筆目的を、「歴史ではなく、寓話的物語、あるいは神話を書くこと」とあるとしている。その神話のテーマとは「復活」であり、それはシドニー・カートンがチャールズの身代わりとなって命を捨てる場面にあらわれているとする。この「再生・復活」のテーマは

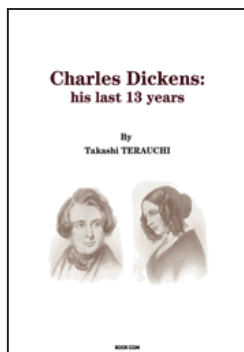
『我ら共通の友』にも現れていることを指摘している。とりわけ水を浄化と生命の象徴として扱うという宗教史上しばしばみられる現象が、『我ら共通の友』における川の扱い方に見られると論じている。

このように氏の著書を読んでいくうちに、制度悪を暴くモラリストとはちがった、「キリスト教作家」としてのディケンズ像が浮かびあがってくる。信仰を純粋な形で取り出して、作中人物やプロットに投影させることで、見事に芸術とキリスト教を融合させるディケンズの作家的手腕を明らかにしている。

では最後にほんの少し苦言を呈することをお許し願いたい。ディケンズを第一級のモラリスト作家であると捉えている一読者から見ると、制度的なキリスト教への批判が論じられていないのはやはり物足りない。氏が「キリスト教作家ディケンズ」を論じる以上、ディケンズのモラリストとしての側面をもう少し取り上げて欲しかった。たとえば、本書では扱っていない作品『エドウィン・ドルードの謎』では、ジャスパーが二重人格の聖歌隊長として描かれ、聖職者の偽善性が攻撃されているのはどういうことなのか。氏は『荒涼館』のジョー少年に言及しながら、ジョーが信仰や教会について全く無知であるという点、ジョーの天国での救済を信じ読者が安心できたとしても、信仰や教会が現実の世界でジョーを救済できるか否かという問題について追求していない。これらの制度批判や信仰への疑念といった点を深く掘り下げていけば、本書はさらに充実したものとなったであろう。



Captain Cuttle and Florence  
From a nineteenth-century American edition



Takashi TERAUCHI,  
*Charles Dickens: His Last 13 Years*  
 (194 頁, 2011 年 1 月, 本体価格 2,400 円)  
 ISBN: 9784903935447

(評) 松村豊子  
 Toyoko MATSUMURA

本書はヴィクトリア朝の大文豪ディケンズの晩年 13 年間の生活に焦点を当て、若く初々しい新進女優 エレン・ターナンとの出会いとその後の彼女との関係がディケンズにどのような心境の変化や「改心」を促したかについて考察した寺内孝氏の英文による野心作である。「前書き」において同氏は、まず、「1860 年のディケンズの『改心』」がこれまで書かれた彼の伝記から抜け落ちていると明言する。‘The biography of Charles Dickens has been written by many writers, but regrettably they all have overlooked the important fact that Dickens underwent ‘conversion’ in the sense of “a spiritual change from sinfulness, ungodliness, or worldliness to love of God and pursuit of holiness” (OED) in 1860’ (i). そして、「改心」を論証する意図のもとに、4 つのエッセイ—“Dickens and Gad’s Hill Place”, “Reading Dickens’s three novels: *David Copperfield*, *A Tale of Two Cities* and *Great Expectations*”, “Dickens Self-Denying”, “Dickens Cornered”—と “Appendixes” が続く。いずれの論考でもエレンとの禁じられた秘密の関係がディケンズの敬虔なクリスチャンの「罪の意識」や「改心」を呼び覚まし、精神的成長を助長すると説かれる。ここで残念なことは著者の作品及び批評研究が未熟であるため、論考に説得力が欠け、「改心」の内容が意味不明に陥っていることである。寺内氏の熱意と思入れの深さは伝わるが、しかしながら、ディケンズの晩年の「改心」と『クリスマス・キャロル』におけるスクルージの「改心」とを同列に論じる短絡的な論展開に時として肝を煎ることも否めない。

晩年のディケンズについて論じる際、発展的な作家像の構築を目指すならば、彼の個人的な女性関係だけでなく時代思潮の特性にも留意することを薦めたい。まず、第一にディケンズが家族の情緒的な絆を最優先する核家族におけるマイホーム型の現代的な父親・夫でなく、所謂大家族の家長であることを見逃してはいけない。家長としての強烈な自負故に、彼は周囲の反対を押し切り公開朗読の巡業に乗り出し、共に暮らす家族だけでなく、別居中の妻キャサリンや愛人エレン、そして、彼女たちの家族や自身の兄弟の妻子等々の困窮す

る親類縁者をも支援したと思われる。G・K・チェスタトンはディケンズが家庭では「暴君」だったと言うが、ディケンズにとって、身内の女性は巷に渦巻く諸々の欲望の犠牲にならないように家庭で保護し指導する対象だった。ディケンズ夫妻の別居騒動の発端は、周知のように、エレンへ渡されるはずの贈り物が間違えて妻のキャサリンに配達されたことである。ディケンズの家長としての自負を考慮すれば、キャサリンの派手な抗議がなければ別居はなく、エレンへの恋愛感情も短期間で自然消滅したと思われる。

氏も指摘するように、晩年のディケンズは確かに不幸・不運に見舞われ、エレンとの密かな親交はその主要因だったと言えなくもない。しかしながら、彼がどの程度自らの言動を悔い改めたかは推測の域をでないのではないだろうか。家父長の自負は最後まで彼の精神的支柱だったと思われる。

ディケンズの伝記的な側面よりも小説家としての変貌に関心がある評者としては、1850年代末（ディケンズがエレンと出会った頃）から1860年代を通して一世を風靡するセンセーション小説の勃興にディケンズが多大な影響を及ぼしたことに着目したい。キャサリンとの別居騒動をめぐり、『ハウスホールド・ワーズ』に出資していた出版社ブラッドベリ・アンド・エヴァンズと決裂したディケンズは、1859年4月に新たに『オール・ザ・イヤーズ・ラウンド』を刊行する。この創刊間もない雑誌に連載されたウィルキー・コリンズの『白衣の女』はほぼ同時期に出版されたエレン・ウッドの『イースト・リン』やM・E・ブラドンの『レディ・オードリの秘密』と並び、センセーション小説の傑作として今日も称賛されている。これらの小説はおしなべて家庭内の不和や暴力を題材としている。家庭の平和が広く称揚された当時、作家として、また、ジャーナリストとして既に地位と名声を確立していたディケンズの後押しがなければ、重婚、家庭内殺人等々の刺激的な、時に荒唐無稽な内容の故に、センセーション小説が隆盛を極めることはなかったと思われる。寺内氏はジョージ・エリオットの作品と生き方がディケンズの「改心」に少なからず影響したと言うが、彼女の多感かつ自立心に燃えるヒロインたちはセンセーション小説の隆盛に多分に影響されているのである。

以上のように考えると、ディケンズの晩年は氏が力説するほど「改心」に色濃く打ちのめされたとは思えない。

最後に基礎文献の調査収集の重要性について述べよう。本書にはディケンズ研究の第一人者であるマイケル・スレイター教授による最新のディケンズ伝 *Charles Dickens* (New Haven: Yale Univ. Press, 2009) が参考文献のどこにも見当たらない。作家作品を論じる場合、論者の興味や意欲は言うに及ばず、基礎文献の活用も読者の賛同を得るためには欠かせないのである。



Lillian Nayder,

*The Other Dickens: A Life of Catherine Hogarth*

(xiv + 359 頁, Cornell University Press, 2010 年 10 月,

本体価格 \$35.00)

ISBN: 978-0801447877

(評) 中田元子

Motoko NAKADA

本書の主張は副題「キャサリン・ホガースの生涯」にあらわれている。奇妙な表現である。キャサリン・ホガースとして人生を全うした人物はいないのだから。結婚してからの呼称は、別居後も含めて、つねにチャールズ・ディケンズ夫人であった。独身時代の名前はすべて消えてしまうのがヴィクトリア時代の女性の名前の運命だった。既婚女性は、その呼称が象徴的に示すように、存在すべてが夫の下に隠されるのである。それにもかかわらず、著者がこのような副題をつけたのは、「ディケンズ」の元に隠されてしまった時期以外も含めてキャサリンの全生涯を記述し、その全体像を描き出そうという意図があったからだろう。考えてみれば、キャサリンは、その64年の生涯のうち、三分の二にあたる42年近くは夫とは別に暮らしていたのである（未婚時代20年余り、別居時代12年、未亡人時代9年余り）。ディケンズとの関係だけでとらえられてきたキャサリンを、その限定的存在から解き放つために選ばれたのがこの副題である。

ディケンズの伝記に登場するキャサリンは、人気作家の夫に比して、あまり魅力的ではない。次々に子どもを産んではディケンズを困らせ、家政管理は妹に任せっきり、醜く肥満し、ディケンズが愛想を尽かして別居に至ったのも仕方がない、と思わされるような存在である。別居時のディケンズのやり方はちょっとひどいと思っても、だからといって、そのような仕打ちを受けたキャサリンの気持ちを思いやることもなかった。ディケンズの人生から追い出された時点でキャサリンの人生も終わりに等しかった。著者はそのようなディケンズ中心の見方に百八十度の転換を迫る。確かに、現在までキャサリンが記憶されているのは、ディケンズと結婚したからである。しかし、キャサリンには、ディケンズとの結婚前も別居後も人生があったのもまた確かである。ディケンズと結婚していた間のキャサリンのことは、ディケンズの伝記で知ることができるが、キャサリンの登場は断片的なものにならざるをえないうえ、そこに描かれているのはディケンズにとってのキャサリンである。著者はキャサリンを中

心に据え、キャサリンの人生すべてをとらえようとする。キャサリンおよび家族や友人・知人の未刊行の書簡、日記などを丹念に調べ、キャサリンの生活、ディケンズ家の状況を明らかにし、あるときは書き直す。とくに、ディケンズと出会う前の十代のキャサリンの様子や、別居後の生活などを伝える記録では、ディケンズのフィルターを通さないキャサリンが出現する。このような作業によって、著者は、従来の退屈な妻という評価を覆し、その尊厳を回復しようとする。

著者が記述するホガース家の長女としてのキャサリンは、後年の、活気のないキャサリンという印象とは異なっている。キャサリンが生まれたのは、文学・芸術活動の中心地であったエディンバラで、母方の祖父ジョージ・トムソンはその活動の中心的存在であった。父ジョージ・ホガースもアマチュアの音楽家で、はじめ事務弁護士をしていたが、キャサリンが十代のころジャーナリズムの道に転身した。父は事務弁護士時代にウォルター・スコットと知り合い、その後も交流をもった。ホガース家には、キャサリンが14歳のとき、メンデルスゾーンが数日間滞在したという。トムソン、ホガース両家とも、経済的成功を求めることより文化的な生活を優先させる家で、女性が知的・芸術的能力を育てることも奨励した。トムソン家とホガース家合同でミニコンサートが開かれる際には、キャサリンはピアノを弾き、歌を歌った。1832年にロンドンに移ってからは、妹のメアリとともに、とくにエアトン家の年頃の二人の娘たちと頻繁に行き来した。キャサリンの手紙には、姉妹の一人に対する不満も書かれており、友人ではあっても、結婚市場におけるライバルであることからくる緊張感が感じられる。一方、ホガース家の長女としては、母が40歳で出産した末の双子を、体調の良くない母に代わって面倒をみて母親のようになついていた。著者の記述からは、文化的なホガース家の娘として音楽・読書を楽しみ、年頃の娘として結婚にも大いに関心を持ち、また、一家の長女として両親から頼りにされた、活気ある未婚時代のキャサリンの姿が浮かび上がってくる。

このように生き生きと生活していたキャサリンだったが、ディケンズとの結婚によってその姿が見えなくなってしまうと著者はいう。その理由としては、まず、身体が文字通り閉じ込められることがあげられる。キャサリンは16年間に12回妊娠し、10回出産、2回流産している（とくに最初の10年間に9回妊娠、7回出産、2回流産）。著者は、これらすべての妊娠・出産について、年ごとの妊娠期間、受胎時期、出産から次の妊娠までの間隔などを示す4種類の表とグラフを作成した。これによって、キャサリンが結婚後16年間にどのような身体状況にあったかが一目瞭然となる。すなわち、1836年から1852年にかけての16年間のうち、妊娠している日が一日もなかった年は1842年の一年



だけであること、長男の出産後2ヶ月余りで次の妊娠をしていること、出産あるいは流産後、妊娠まで一年以上間があいたのは2回しかないことなどがわかる。また著者は、一般的な女性がこれだけの妊娠をするためには月に何度性交渉をしなければならなかったかも、医学的根拠に基づいて推測している。キャサリンの出産回数は、当時の平均6回という出産回数からみて多いものの、決してまれな例というわけではなかった。キャサリンの母は18年間に9回、ディケンズの母も17年間に8回出産している。キャサリンと同じ世代でも、俳優マクリーディの妻キティは10人、マーク・レモンの妻ネリーも10人産んでいる。画家フリスの妻も10人の子持ちであった。ふつう妊娠・出産は病気ではないとされる。またキャサリン自身は多産を豊かさとして肯定的に受け止めていたようだ。それでも、著者の統計表は、キャサリンの身体が頻繁に閉じ込められたことを明白に示す。

著者は、キャサリンが身体的にのみならず、精神的にも閉じ込められていったという。支配欲の強いディケンズが家事万端にも采配をふるうので、キャサリンが主体的に考え行動する場面がなくなっていったというのである。また、著者は、キャサリンがディケンズの依頼を受けて行ったことにディケンズから文句をつけられる場面を拾い上げている。ディケンズは、キャサリンあての手紙に返事を書いてしまう一方、キャサリンがディケンズに断りなく（キャサリンの知人でもある）ディケンズの知人に手紙を書いたと行ってとがめだてした。することなすことに注文がつけば意欲も萎えてくるだろう。著者は、後にディケンズが愚鈍とけなした妻は、彼自身が作り出したのだと示唆している。

著者は、キャサリンは後年の批評家・伝記作者たちによっても閉じ込められたといい、この過程が、ピルグリム版ディケンズ書簡集に収められているディケンズとの婚約時代のキャサリンの手紙の扱われ方に象徴的に示されているとみる。これはキャサリンが従姉妹のメアリ・スコット・ホガースに宛てて書いた手紙で、キャサリンが便箋一枚半書いたあと、二枚目の下半分にディケンズが追伸を書いているものである。これが、書簡集では、ディケンズの追伸の方が本文に載せられ、キャサリンの手紙本体はページ下部の注に、小さなフォントで印刷されている。ディケンズの手紙集なのだから、ディケンズが書いたものが主となるのは当然のことと考えられるかもしれない。しかし著者はこれを、キャサリンの結婚後の人生、すなわち欲望も表現も抑圧された人生を書簡集の編者が再現しているとみる。

著者はまた、批評家・伝記作者たちが無批判に事実誤認を引き継いでいることを指摘する。たとえば著者は、キャサリンが出産のたびにうつになったとされていることについて異議を唱える。キャサリンは、第一子チャーリーの出産



時、授乳がうまくいかず、付き添っていた妹メアリによれば、「今お乳をあげられないんだから将来絶対にこの子に愛してもらえない」と嘆いていた。母乳を母性愛と同一視する言説は当時支配力をもっていたので、母乳を与えないことを苦にしてうつ状態になるということはあるようなことに思われるかもしれない。しかし著者は、これは原因と結果が逆であると指摘する。つまり、産褥期のホルモンバランスの崩れと、産後4週間産室にとどまらなければならないという規範に縛られて、精神的に追い込まれてうつ状態になり、その結果授乳困難に陥ったというのである。第三子と第四子の出産後のディケンズの手紙には、キャサリンが順調に回復していることが報告されているが、このときにはディケンズの認識の改まりによってキャサリンの安静期間は短縮されており、この慣習の拘束からの脱却によって産後うつに悩まされなくなったとしている。また著者は、第九子ドーラの出産後のキャサリンの状態について、批評家・伝記作者たちが、ある一つの伝記の間違いを反復していると指摘する。それは、ドーラの出産後キャサリンがとくにひどい産後うつに陥り、そのためモルヴァーンへ水治療にでかけたとされていることについてである。著者は、モルヴァーンへ行ったのは、もともとの持病である頭痛治療のためであり、産後うつではなかったことを、すでに刊行されている書簡などによって確認する。著者の指摘をみていると、批評家・伝記作者たちは、すでに作り上げられたキャサリン像に縛られ、素直に事実をみることができなくなっているのではないかと思われる。

著者はクーツ銀行のディケンズの金銭出納台帳にも再検討を加え、キャサリンの立場を回復させる。この台帳は過去に調査されたこともあったが、ここでは、キャサリンの父ジョージ・ホガスへの支払いを、ジョージナ・ホガスへの支払いと取り違えていた。この間違った調査に基づいて、これまで批評家・伝記作者たちは、ディケンズ家の家政について、1850年代の前半から、ジョージナがキャサリンに代わって一切を取り仕切るようになったと主張してきた。しかし著者は台帳を再検討し、ジョージナには1846年から1857年までずっと、ガバナスと同等の金額しか与えられていなかったこと、この期間キャサリンにはジョージナよりずっと多い金額が与えられていたことを明らかにする。これによって、ディケンズがキャサリンとの別居を考えるようになるまでは、家政に関してジョージナには限定的な権限しかなかったことが明らかになり、ジョージナが無能なキャサリンに代わって全面的に家政を取り仕切っていたという通説が覆される。

別居後のキャサリンのことは、ディケンズ中心の記述では消えてしまう。別居をめぐっては、ディケンズのやり方を非難する声も多かったが、人気作家は

キャサリン抜きで生き続ける。一方、キャサリンの方は、別居騒動では同情を集めても、その後の人生は記録から消えてしまう。著者は、別居後のキャサリンの手紙や、つきあいのあった人々の手紙や日記、自伝、回想録などをもとに、多くの人々が継続して、また新たにキャサリンと交流をもったこと、キャサリンも人々との付き合いを楽しんだことを明らかにする。キャサリンが別居後も交際を楽しもうとしていたことは、別居後の家で12人用のマホガニーのテーブルセットやシャンパングラスを1ダース買っているところにも表れている。ジョン・リーチ主催のディナーの席でジョン・エヴァレット・ミレイの隣になったときには、画家一家を自宅に招待した。ウィリアム・パウエル・フリスの娘ジューン・パントンの自伝は、もはやディケンズが訪れることのなくなったフリス家に招かれたときのキャサリンの楽しそうな様子を伝えるとともに、一緒に観劇に行ったとき、友人と来ていたディケンズを見つけて気が動転し帰宅したキャサリンのことも伝える。キャサリンが1860年代に集めていたカルト・ド・ヴィジット（名刺版写真）のアルバムには、テニスン、クルックシャンク、ブルワー＝リットン、オーガスタス・エッグ、キャロライン・ノートン、ハリエット・ピーチャー・ストウ、ウィルキー・コリンズ、サッカー、アンデルセンなど、別居以前の知人たちのものが含まれており、キャサリンにあてて一言書き添えている人もいる。キャサリンはまた、新しい友人とのつきあいも広げていく。小説家アニー・トーマスからは、赤ん坊の洗礼式でゴッドマザーになってくれるよう頼まれる。マーク・レモンの紹介で、画家ジョージ・チェスターの妻メアリ・チェスターとも知り合いになり、1860年代から70年代にかけて親しくつきあった。ディケンズのことを「作家としては感服するが、人間としては軽蔑する」と言ったウィリアム・ハードマンは、キャサリンをしばしば自宅に招き、また妻とともにキャサリンを訪問した。著者はキャサリンと行き来した人たちの残した記録をたどり、キャサリンが別居後も多くの友人・知人と交際を続けたことを明らかにしている。

別居合意書では、別れて住むことになった子どもたちとの面会は、いつでもどこでもできるということになっていた。しかし、母を訪問して帰ると父の機嫌が悪いというようなこともあり、母子が望むだけ会えるという訳ではなかったようだ。また、ディケンズは遺言で子どもたちにジョージーナに受けた恩を常に記憶するようにと書き、暗にキャサリンとの距離を保たせようとした。しかし父の影響力がなくなったあとは母子は親しく行き来した。第七子シドニーは、両親の別居時にはまだ11歳だったので自分の意志による母との同居はかなわなかったが、父の死の前後にはついに自分の住所を母の住所に定めることができた。チャーリーがギャッツヒル・プレイスを買ったことにより、妻

としては住めなかった場所を母として祖母として訪れることも多くなり、孫たちに絵本の読み聞かせをして楽しむこともできた。ディケンズの妹、レティシア・オースティンとは1860年代親しくつきあい、彼女のために劇場のボックス席を取ってあげたりしている。さらには以前の使用人ともつながりを保っており、使用人の一人のためには職探しをし、また別の元使用人には赤ん坊のベストを送ってその健康を気遣っている。知人、親類の出産については関心が高く、しばしば産婦と赤ん坊の健康を案じている。このようにキャサリンの生活の一コマコマを拾うことによって、著者は失われていた別居後のキャサリンの人生をよみがえらせる。

本書はまた、キャサリンと他の女性たちとの関わりを描き、結果的にヴィクトリア時代のミドルクラス女性の多様な人生を描き出すことにもなっている。母方の叔母ヘレン・トムソンは独身を貫いた。ディケンズの弟フレッドと結婚したアナは家庭内暴力に遭い離婚する。アナの姉のクリスティアナは、産後一週間でパーティーに出席するなど慣習に縛られない生き方をした。『ハウス・ホールド・ワーズ』に寄稿していたR・H・ホーンの妻キティは、夫がオーストラリアの金鉱採掘にかけたものの失敗に終わったことがわかると、女性ギルドに入り技術を身につける。その後、働いて経済力がつき、自立できることがわかると、夫に離婚を切り出す。キャサリンの周りの女性たちにはさまざまな生き方があった。なぜ「家庭の天使」が理想とされたか、理由が分かるようだ。

女性たちの中でもとくに三人の妹たちとの関係は、それぞれ独立した章（音楽一家出身の姉妹たちにちなんで「間奏曲」と名付けられている）を立てて扱われている。とくにヘレンは、ディケンズの伝記では、夫妻の別居時にエレン・ターナンとの噂を流したとして、その母親とともにディケンズから激しく非難された人物としてしか登場しない。しかし本書では、別居後のキャサリンと親しく行き来した人物としてクローズアップされる。ディケンズの目の敵にされ、姪、甥たちにも会わせてもらえなかったが、キャサリンにとっては強力な味方だった。ヘレンは独身時代から歌唱教師として音楽雑誌に広告を出すなどして自活していたが、別居後のキャサリンは、ヘレンが企画・出演をしたコンサートのチケットを友人に送るなど、マネージャーのように助けていた。ヘレンは結婚後はキャサリンの近くに住み、二児を出産したが（一人は幼くして死亡）、ワーキングマザーとして働き続けた。結婚後4年足らずで夫が亡くなったあとは、働きながら一人で子育てをしていく。仕事を求めて転居し、キャサリンからは離れて暮らすことになるが、年に数回は行き来した。ヘレンの娘のメイが、甥姪たちのなかでただ一人遺贈を受けたことから、ヘレンとのつながりの強さがわかる。

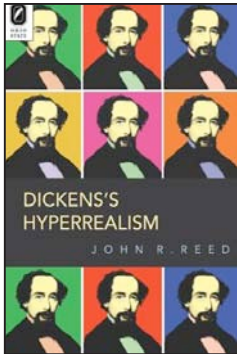
著者による遺言書の検討はもうひとつの異例な点を明らかにする。妹ジョージナが、子どもたちの配偶者と同じ範疇に入れられており、ホガース家の思い出の品がひとつも遺贈されていないことである。キャサリンは、自分の味方にならなかった妹への気持ちを、最後にこのような形で表したのだ。キャサリンの遺贈の対象者には、親類縁者のほかに、親しい友人、過去現在の使用人4人までが含まれている。キャサリンは一人一人にあてて、遺贈する物とその来歴を書き記している。贈られる品々は決して高価な物ではないが、それらはキャサリンと受け手との関係によって選ばれており、その価値はその関係自体にあると著者は示唆している。

著者はキャサリンの人生全体を記述することによって、キャサリンはディケンズのみと関係をもったわけではないという当たり前のことを明確に示した。キャサリンは妻、母であるだけでなく、娘、祖母でもあり、また友人、知人、雇用主でもあった。本書では、それぞれの立場での様々なキャサリンの姿が見られ、時にはキャサリンの声を聞くこともできる。著者が描き出したのは、一人の独立した女性が、忍耐強く、人間関係を大切に、丁寧な生きた姿である。

最後に、本書に対する日本支部の貢献についてふれておきたい。謝辞の冒頭近くに、日本支部の原英一、佐々木徹、植木研介の三氏に対する感謝が捧げられている。キャサリン・ディケンズについて学生たちと話すために招いてくれ、この研究の開始段階から支援してくれた、とある。ディケンズの人生から無情にも排除されてしまったキャサリンの、初の本格的伝記が書かれるにあたって、日本支部の後押しがあったことを知り、心温まる思いがした。

#### 書評対象図書及び評者の募集

『年報』の書評では、ディケンズ関係及びディケンズと関係の深いヴィクトリア朝文学・文化関係の書籍を扱っております。もちろん海外での出版物も対象です。取り上げるべき本がありましたらご推薦ください。また、評者についても自薦・他薦・著者本人の推薦のいずれでも歓迎ですので、支部長（編集担当）または年報編集補佐までお申し出ください。少なくとも国内で出版されたディケンズおよびヴィクトリア朝関係書籍はすべて取り上げたいと考えておりますが、評者の引き受け手がなく断念した場合があります。ご協力をよろしく申し上げます。



John R. REED,

*Dickens's Hyperrealism*

(132 頁, Ohio State University Press, 2010 年 11 月)

ISBN: 9780814211380

(評) 猪熊恵子

Keiko INOKUMA

事実は小説よりも奇なりとしたら、リアリズム小説とはいったいどのくらい奇なるものを、どのような手法で描き出すものなのだろうか。そもそも奇であれ正であれ、「現実」や「事実」は描き出されるべき確たる対象として実在するのだろうか。そして「リアリズム作家」のラベルは、どのようなプロセスを経て1人の作家に付与されるのだろうか。ジョン・リード著『ディケンズのハイパーリアリズム』は、ディケンズの語り的手法を丁寧に跡付けながら、これらの問題に正面から向き合っていく。その過程でディケンズは、リアリズム作家の一群に連なるものとしてではなく、むしろロマン派の流れを汲むものとして立ち現われてくる。しかし本書は決して、ディケンズの懐古的身ぶりを読むものではない。逆に、リアリズム的手法を積極的に取り入れながらも、あえてそこに誇張や意識的なずらしを加えていくディケンズ独自の語り方に注目する。そして、リアリズムの懐深く入り込んだうえで、内側からその「リアル」の作為性を暴露しようとするディケンズの姿に迫っていく。したがってリードが序論で明らかにするとおり、分析の焦点はもっぱらディケンズ小説の内容的側面よりも、手法的・スタイル的側面に絞られる。言い換えるなら、ディケンズの描き出した19世紀社会がどれほど「リアル」であったかを問うのではなく、一見「リアル」な世界を透明な視点から描くようである、実はその絵のなかに、ペンを握る自分自身を書き込んでいくようなディケンズの技巧や意図を解き明かしていくのである。もちろん、歴史的・社会的・文化的コンテクストが捨棄されているわけではない。それでも、「作者は死んだ」と言われて久しい現代において、作家の書き方や意図、その手法的変化にじわじわと迫っていくような本を書くことが、きわめて難しい作業であることは間違いない。ディケンズの鮮やかな手さばきを論証するためには、リード自身の軽やかな議論さばきが必要とされるからである。本書がこの困難をいかに「ハイパー」に乗り越えているのか(否か)を見るために、まずは「ハイパーリアリズム」の意味を簡単に確認したうえで、概略をまとめていきたい。

リアリズムとは本来、目の前の「現実」をありのままにページの上に写し取ることを標榜する。そのため、語り手の恣意性や物語の作為性を読者に意識させるような手法は、極力避けるのが定石である。しかし、あらゆるフィクションに内在する作為性、もしくはすべての語る行為にまつわる騙りの要素を考慮するなら、「なるべく本当らしい嘘を書く」というプロトコルがはらむ矛盾はあまりに明らかだろう。本書は、「リアリズム」という手法や概念自体がまだ流動的な時代にあったヴィクトリア朝において、ディケンズがこの矛盾に対してきわめて意識的であったことを「ハイパーリアリズム」という言葉を用いてえぐり出そうとする。全六章はそれぞれ、「描写」「擬人化」「メトニミー」「リダダンシー」などさまざまな語りの技法を取り上げ、ディケンズ作品を精読しながらその手法を跡付けていく。この分析を通じて、ディケンズがリアリズム的な語りの透明性を志向するのではなく、むしろ自らの語り手としての意図やプレゼンスを明示／暗示しようとするさまを明らかにする。つまりディケンズ作品における一見「リアリスティック」な手法は、「リアル」な世界を構築するためではなく、むしろ「リアル」を構築する作家の姿を示すように使用されるのである。当然、「リアリティ」は自然な形で提示されることはなく、過度に誇張された状態で描き出される。しかし、意識的に誇張され作りこまれた「リアリティ」こそ、「本当らしい嘘」の矛盾を超えたところに、小説よりも奇なる現実の世界を浮かび上がらせるのかもしれない。そしてこの「実」よりも奇なる「真」の世界こそ、ディケンズの「ハイパーリアリズム」が描き出す「ハイパーリアリティ」なのである。

第一章「描写」では、『オリヴァー・トゥイスト』のビル・サイクスが最期を迎える「ジェイコブズ・アイランド」の描写が取り上げられている。ヘンリー・メイヒュー、トマス・ハーディ、エミリー・ブロンテらの描写の技法との違いが検証され、何気ない場所の描写ひとつが、いかに豊饒なイデオロギーの意味を宿しうかが議論される。例えば「詳細さ」という観点から見れば、1ページに満たないディケンズの描写よりも、メイヒューがルポルターージュ的に書いた「ジェイコブズ・アイランド」の描写のほうが格段に細かい。しかしディケンズの「荒さ」は、抜け落ちた箇所を読者の想像によって補わせようとする仕掛けとして説明される。さらに彼を書く「ジェイコブズ・アイランド」は、『オリヴァー・トゥイスト』という作品世界の中で、サイクスやチャーリー・ベイツらの経験や行動の舞台となることによって、実在する「ジェイコブズ・アイランド」よりもさらに「リアル」な場所としてその存在感を獲得する。こうして物語の内と外をつなぎ合せ、「虚」なるフィクションの内部に「実」なる場所を描き出し、その「真」の姿を強烈に印象付けていくような手法こそ、ディ



ケンズの描写における「ハイパーリアリティ」なのだ、とリードは言う。ここからハーディやブロンテとディケンズの違いもおのずと明らかになるだろう。ハーディらが作品内世界に固有の場所を構築し、自己完結的に存在する場所へと読者の想像力を引き込むのに対し、ディケンズはオリバーのいる作品内ロンドンへと読者を誘い込みつつも、再び作品外の19世紀ロンドンへと彼らの意識を回帰させ、社会の現状やその改革について考えさせるからである。

第二章ではディケンズの現在時制の使用が議論の対象となる。一般にリアリズム小説は、物事の事実性を客観的な視点から記録した三人称・過去時制の語りとの親和性が強く、逆に現在時制との相性は悪い。しかしディケンズは、特徴的な現在時制を『荒涼館』『互いの友』『エドウィン・ドルードの秘密』の三作品で用いている。リードはなかでも特に『エドウィン・ドルード』に注目し、緻密なナラトロジー分析を提示する。『エドウィン・ドルード』の語りは、現在時制を用いて目の前の出来事を語る一方で、カメラとしての客観性を貫くこともなく、登場人物の心中に自由に出入りし、彼らに対する価値判断を下していく。それでいてこの語り手は、先の出来事についての情報を読者よりも多く握っているようにも思われぬ。いきおい読者は、常に不確定な未来への不安に晒されることになる。リードはここから、不透明な未来への不安を感じながら神意にすぎたる人々の姿と、『エドウィン・ドルード』の現在時制の語りを経験する読者の姿の間に、明らかな相似の関係を見てとっている。小説の先の展開が語り手にすら不透明であるという点を意識しながら、それでも語り手の言葉より他にすぎたるものがない読者の状態は、不確定な未来を前に神に身を委ねて生きる人々のそれと重なるからである。こうして『エドウィン・ドルード』は、一見「リアリズム」と相容れない現在時制の語りを用いることによって、かえって非常に「リアル」な形で、その読者たちに漠然とした未来への不安を疑似体験させる。リードはこれこそディケンズの「ハイパーリアリティ」であると結論づけている。

第四章では逆に、リアリズム文学との親和性がきわめて強い「メトニミー」が議論される。『オリヴァー・トゥイスト』に出てくる白いウェストコートの紳士、『荒涼館』の復讐少年、『互いの友』の分析化学者など、地味ではあるが味のある登場人物たちが次々に議論の俎上に載せられる。ここでもリードが打ち立てる構図は、ディケンズがリアリズムの道具であるメトニミーを作品内で多用しながらも、その本来的な機能を崩すように使用することで、単純な「リアリズム」とは異なる世界観を作り上げている、というものだ。ディケンズのメトニミーは、単に一回限りの連想に留まらず、小説全体を通してさまざまな場所に顔を出す記号として増幅していく。その結果、他のメタファーなどと混



然一体となって、まるでアレゴリーのような作品世界を形成するのに寄与しているのである。

第五章では、一般的に「感傷的虚偽」(pathetic fallacy)などの観点から、リアリズムとの相性が悪いとされる「擬人化」が議論される。例えば『ピックウィック・ペイパーズ』の分析では、擬人化した椅子がトム・スマートに未来を預言するエピソードが取り上げられている。トムは当時を振り返って、この荒唐無稽な話は確かに「本当のこと」だと主張するが、その姿を描く語り手は、「それを信じるか否かは読者次第」だと突き放す。こうした語り手の姿勢は、「擬人化」がはらむ「反リアリズム性」を、意識的に相対化するディケンズの姿として読み解かれる。また、その相対化の手際を読者に鮮やかに印象付けようとするディケンズの書きぶりから、彼の「リアリズム」への抵抗と、語り手としての自らのプレゼンスを保持しようとする意図が議論される。続く第六章「リダダンシーの豊饒」でも、ディケンズの「リダダンシー」は単に意味を強調するための過剰な反復にとどまらず、語り手が物語を包括的に支配するための手段であることが示されている。さらに、自らの支配力を示しながら読者を誘導する手法が、ディケンズの作家としての成熟にあわせて次第に洗練されていくさまも明らかにされる。

ここまでの概略から明らかなように、リードの議論は一貫したテーマを設定し、「リアリズム」の概念がまだ流動的であった時代に、その手法を相対化して鮮やかに使いこなすディケンズの手さばきを解き明かしている。しかしながら、「リアル」とは何か、「ファンシー」とは何かという定義の難しい不安定な場所に足場を据えながら、明確なテーマをもって議論を推し進めていく以上、必然的に議論の説得性よりも恣意性のほうが目につく箇所も出てしまう。例えばディケンズの特徴的なメトニミー使用について論じた箇所では、メタファーやアレゴリーと一体化していくメトニミーのあり方が、本当にディケンズという一人の作家だけに限られたものなのか、疑問が残る。他の「リアリズム」の流れを汲む作家のメトニミーの使用とディケンズのそれを並置して、違いを明らかにするのが解決法かもしれないが、果たして「純粋なメタファー」「純粋なメトニミー」というものが互いに交差しあわずに存在するものなのか、また仮に線引きが可能だとしても、そもそもそれを作品内で一貫して完璧に使用する作家がいるのか、問題は尽きない。しかしこうした問題を抱えてなお、またはこうした問題を抱えるからこそ、リードの議論は文学批評の根源的な楽しさに気付かせてくれる。「現実」の实在や、それを批評する手続きに対して徹底的にメタな視点から留保を加えなくてはならないという、ポストモダニズム以降の批評のパラダイムから解き放たれて、目の前の小説を読み、その文字を

操る作家の意図を想像し、そこから新たな話を紡いでいく楽しさを存分に教えてくれるように思うからである。事実、リードが選ぶディケンズ作品内の引用箇所は、どれも決してオーソドックスな部分ではない。それだけに、本書を読みながらディケンズのディテールの作り方にひたすら感心したり、オリジナル作品を紐解いてみたり、また数多の頁のなかからその場所を選びだしたリードの意図について考えてみたりする作業は楽しい。もちろんこうして楽しませてくれる本書の力の源が、多くの文献を引きながら、自らの議論の流れに自然に組み込んでいくリードの老練な手さばきにあることは間違いないだろう。

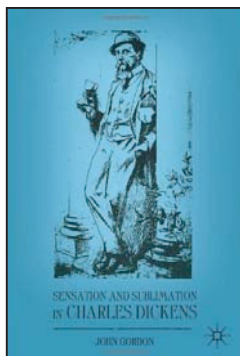
リードはディケンズの書きぶりについて、序論と結論でそれぞれ以下のようによまとめている。

What Dickens tried to do [ . . . ] was to give his audience the impression that they were reading readerly texts, while, in fact, he was writing writerly texts.

(6)

Dickens behaved like a maestro. He was the one in control; he directed the way his readers' imaginations should go. (106)

ミハイル・バフチンのヘテログロッシアの議論以来、ディケンズ作品内部に横溢する多量の音声の存在はたびたび指摘されてきた。しかし本書を通して見えてくるディケンズ作品には、むしろ単一の語り手の声が宿っているように思われる。作品世界に溢れる多くの登場人物の声、彼らが動き回る場所を満たす音はすべて、マエストロであるディケンズの振るタクトにあわせて響いてくる。我々読者は、作品世界の喧騒や雑踏の「音の海」を自由に泳いでいるようでいて、実は彼の作り出す波のリズムに酔って気持ちよくなっているだけなのかもしれない。それが「リアル」なディケンズ世界なのだとしたら、どんなに批評的に難解な時代が来ても、やはりどこかにあるはずの「権威ある作家」の「単一の声と意図」を探し続けようとする批評上の手続きは、少なくともディケンズという作家に関する限り正しいのかもしれない。もちろん、我々がこうした手続きを取ることに對して、相対化のまなざしを忘れず、少しだけ「ハイパー」な立ち位置を保持する限りにおいてはであるが。



John Gordon,

*Sensation and Sublimation in Charles Dickens*

(226 頁, New York: Palgrave Macmillan, 2011 年 5 月)

ISBN : 9780230110885

(評) 渡部智也

Tomoya WATANABE

昨年、イギリスの大学院に留学していた時のことである。最初のオリエンテーションと呼ぶべき授業の後、我々学生は建物1階にあるカフェテリアでお茶を飲みながら親睦を深めた。宴もたけなわ、といったまさにその時、私は一人の妙な男性に話しかけられた。妙な、というのは、その出で立ちと中身の織りなすコントラストゆえである。その人物、外見はまさに若返ったピクウィック氏と瓜二つで愉快そのものなのだが、話してみるとその関心事はセンセーション小説や人体解剖など、陰鬱としたものばかり。例えるならば、外見はピクウィック、中身はユライヤ・ヒープといった塩梅で（あくまでイメージではあるが）、全体に、まるでディケンズ作品から飛び出てきたかのような印象を受けたのだ。一体誰だろうと思ったこの人物こそ、その数カ月後に授業で度々お世話になることとなった、同大学教員のアンドリュー・マンガム氏（Andrew Mangham）であったのだが、その段階での私はそのことを知るよしもない。ただ、変わった研究をする人がいるんだなあ、と思っただけであった。ところがその後、他の学生の話や、他大学の研究者を招いての特別講演などを聴いていると、この「センセーショナル」というキーワードに関心を寄せる研究者が少なくないことを実感した。近年、新刊書籍や論文を見ていると、とかくセンセーションと名のつくものが多く、この分野が強い関心を集めているということに漠然と感じていたのであるが、その知識が経験によって裏付けされた格好となった。この経験があまりに強く頭に残っていたためであろうか、今年5月に出版された「センセーション」と名のつく批評書、ジョン・ゴードン（John Gordon）著、*Sensation and Sublimation in Charles Dickens* を最初に目にしたとき、これもまた、その潮流に乗った一つの批評書なのだろう、と思った。そしてページをめくり、私は自らの浅学を恥じ入ることとなった。

OEDによれば、‘sensation’という言葉は、（1）感覚の働き（an operation of any of the senses）、（2）心情、感情（a mental feeling, an emotion）、（3）興奮、強烈な感情（an excited or violent feeling）という3つの定義に分けられており、

センセーショナル小説などという場合のセンセーションは、当然3つ目の意味に当たる。しかし、本書のイントロダクションで著者が説明しているように、本書で言うところのセンセーションとは、あくまで「視覚や聴覚などの感覚にまつわるもの」を指し、*OED* の定義で言えば、1番目の意味で使われているのだ。センセーションというタイトルからすぐにセンセーショナル小説等を思い浮かべてしまった自身の短絡的性分を呪うとともに、さらなる精進の必要性を痛感した次第である。

さて、その著者ジョン・ゴードンである。著者略歴を見れば明らかなことではあるが、彼は20世紀英文学、とりわけジェームズ・ジョイスを中心に研究を行っている研究者で、その著書もジョイスに関するものがほとんど。私の調べた限りでは、本書がディケンズについて書いた彼の最初の書籍ということになる。言うなれば、ジョイシアン(ジョイスの研究者)の眼から見たディケンズ、という趣のある批評書である。

まず簡単に、本書の中身を概観したい。本書は大きく分けて4つの章からなり、その中で3つの作品を扱っている。まず、'What Right Have They to Butcher Me?' と題する第1章では『オリヴァー・ツイスト』を論じている。表題は死刑宣告を受けたフェイギンの有名なセリフであるが、ジョン・サザランド (John Sutherland) が既に指摘しているように、当時の法律に照らし合わせて考えた場合、自ら殺人を犯したわけでもないフェイギンがなぜ絞首刑になるのか、というのは大いに疑問のある問題である。ゴードンはこの疑問を起点として論考を開始し、この作品が、イエス・キリストを体現する人物であるオリヴァーと、過ぎ越しの祭で食べるパン (マツォー) に使うためにキリスト教徒の子供を殺し、その血を奪わねばならないユダヤ人を体現する存在であるフェイギンとの対立の物語である、と考察し、この物語の根底に、キリスト教社会に根強い「血の中傷」 (blood libel) が存在することを明らかにする。

続く第2章、'“Thankee, Mum,” Said Toodle, “Since You *Are* Suppressing”' では、『ドンビー父子』を扱う。著者は、『ドンビー父子』は『オリヴァー・ツイスト』等のそれまでの作品とは異なり、社会的イデオロギーとはあまり関わりのない作品ではあるが、一方でディケンズの言葉の扱いが著しく進化した作品であり、特に第30章において、ドンビーがマホガニーのテーブルを見やり、そこに自分の考えを投影させる場面ほどすばらしい場面は、20世紀以前の小説には他に類を見ない、と絶賛する。そして、この物語においては重要なモノはすべて隠され、周辺に、下部に追いやられており、それを放出させる媒介としての言葉の力こそが重要だと言うこと、従って、言葉の表面に現れた意味ではなく、表面に現れない隠された含意こそが重要であることを例証する。

第3章は‘In a Thick Crowd of Sounds, But Still Intelligibly Enough to Be Understood’と題し（といってもこれらタイトルは全て作品からの引用だが）、『荒涼館』を扱っている。著者は、この作品は3つの神話的な組み合わせ、すなわち、ダイダロスとイカロス、ペルセウスとメデューサ、オルフェウスとエウリュディケの物語が下敷きになっており、最も触れたいものは触れてはならないものである、という「毒されたキス」(poisoned kiss)のモチーフがその基盤となっていると考察する。そして、『荒涼館』は言葉の扱いが『ドンビー父子』から更に熟練した作品であり、外的なものと同じくらい、内的、心的メカニズムが問題となっている、心理学的迷宮のような作品だと述べる。

第4章は少し趣向を変えて（もっとも、前章の続きであることには変わりないのだが）、『荒涼館』に関する10の疑問を考察する、という内容になっている。この疑問も、例えば章のタイトルにもあたる「エスタは綺麗なのか？」(Is Esther Pretty?)を筆頭として、多くの読者が共有するであろう作品にまつわる謎ばかりであり、非常に興味深い。後ほど述べるが、本書の中でもっとも面白い章と言えるかもしれない。こうして10個の疑問に著者なりの解答を与えた上で、この作品にはディケンズの時代の「夢の論理」(dream logic)が働いている、と論じて締めくくる。このように、本書ではこれら3つの作品それぞれの根底に流れる力を示し、それにディケンズが応える様を例証している。

本書の特色を一言で言うならば、「言葉に対する意識の高さ」になるだろう。「20世紀最大の言葉の魔術師」とも称されるジョイスを研究するためには、「言葉」に対するとりわけ強い意識が求められるのは間違い無い（無論、これはディケンズを研究する上でも極めて重要な要素である）。その観点から見ると、さすがに著者ゴードンはジョイス研究で名をはせた人物だけあって、言葉に対する意識が非常に高い。そして、その言葉に対する洞察の深さを巧みに用いて、物語の表面に現れていないものを暴き出す、というのが本書の特徴となっている。具体例を見てみよう。第1章においてゴードンは、フェイギンと絞首刑の切っても切れない関係を強調する。その際に、彼の周りに絞首刑のイメージが満ちているとし、普通に読んでいては見落としがちな‘knot’, ‘hanging’, ‘throats and necks’などの言葉の使用、例えばフェイギンの‘knotted club’や、ナンシーの指から鍵が‘hanging’している様、あるいは‘Toby Crackit has been hanging about the place’といった表現に言及している。また第2章において、カーカーとイーデイスの駆け落ちに言及する際には、イーデイスが‘her arch of diamonds’と描写されるティアラを投げ捨てる場面と、その少し後でカーカーが‘arch’をくぐってイーデイスの元に行く描写に着目する。その上で、ラテン語における‘arch’を表す言葉‘fornix’が「姦通する」(fornicate)の語源となっ

ている事を示し、ここで二人の関係が暗示させられているという。いずれも、言葉への強い意識を感じさせる考察である。

著者の言葉にこだわった細かい読みが最も生かされているのが、第4章で『荒涼館』にまつわる10の疑問に解答する部分である。例えばその中に、「オルトンスはいかにデドロック夫人の真実を掴んだのか?」という疑問がある。状況を概観した後、彼はオルトンスがエスタに自分を雇って欲しいと懇願し、彼女の手を取ってキスをする場面において、*'takes note, with her momentary touch, of every vein in it'* と、*'take note'* という少々場違いな表現が使われていることに着目する。そして、ジョーがオルトンスとデドロック夫人の手の違いについて証言する場面（つまり、手で人の区別が出来る、というエピソード）に言及した上で、夫人の *'keeper of the gloves'* であるオルトンスがもっとも手と手の類似に気づきやすい立場にいる人間であると述べ、オルトンスがここでエスタと夫人の手の類似に気づいたのでは、と推理している。やや飛躍が見られるとはいえ、言葉の使い方に重きを置くからこそなせる、面白い考察と言えらるだろう。

このように、言葉への意識の高さに裏打ちされた興味深い論を展開する本書であるが、それが時に空回りするケースも少なくない。例えば著者は、『オリヴァー・ツイスト』を論じる過程で *'composing'* という単語に注目し、*'Characters in this novel are sometimes described as 'composing' their scattered thoughts before sleeping'* と述べている (29)。確かにオンラインコンコーダンスをチェックすると、*"composing"* という表現は作品で4度用いられているが、しかしそのうち筆者の述べる条件に当てはまるのはたったの2例のみで、*'sometimes'* とまで述べて論を構築するのはいささか苦しいと言わざるを得ない。また『ドンビー父子』においては、「胸」(*breast*) という単語に着目し、同時代の他の作家達が何のてらいもなく *'her breasts'* という表現を使う一方で、自分の知る限り、ディケンズは自身の作品中で女性登場人物に *'breasts'* と複数形で表現することはなく、*'it is always "her breast," as if in overdecorous denial of the most obvious thing about them, that they come in twos'* と述べる (106)。なるほど、『ドンビー父子』においてはその通りである。しかし、上記と同様にオンラインコンコーダンスを利用すれば明らかなことであるが、ディケンズは『骨董屋』でネルの *'breasts'* に言及しており、この問題を考えるのであれば、この事例に関する言及があってしかるべきだろう。このように、その論の根拠にいささか不正確さが見られるのは非常に残念である。文学テキストは一語一句読むべき物で、コンコーダンスなどを用いて収集したデータには意味がない、という考え方もあるかもしれない。しかし著者は序文の中で、本書を書くにあたり、何よりもまず Google books やメーリングリストに助けられた、と謝辞を述べ、デジタルな

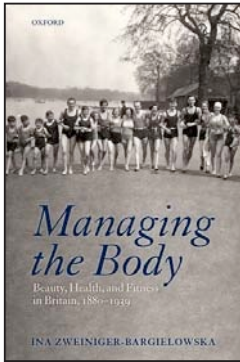


研究手段を駆使してこの論を構築したと述べている。それならば、機械を利用してこのあたりの裏付け調査（5秒で終わる作業である）を行なってしかるべきだったのではないかと思う。

他にもいくつか、不正確な記述が見られる。42ページで、フェイギンは、作品前半に描かれるキリスト教徒の子どもを殺す大人達、すなわちマン夫人やビードル（無論バンプルのこと）、救貧院委員会などと結びつく、と述べている。それはよいとして、その結びつく面々の中に Gammidge なる存在しない人物の名前が挙がっているのは理解に苦しむ。これはおそらく Gamfield の間違いであろう（仮に『デイヴィッド・コパーフィールド』のミセスガミッジと混同したとしても、彼女は Gummidge であり、綴りも異なる）。また80ページで、カーカーの死の直前、彼が不眠に陥り、その旅路が「幻想のよう」(like a vision) であることに着目した際には、この場面でディケンズは「20世紀になされる急速眼球運動 (Rapid eye movement, レム睡眠の「レム」にあたる) の研究、すなわち、眠っているときに夢を見ることが出来ない、代わりに目覚めているときに幻覚を見る、という研究を先取りしているようだ」と述べているが、この読みには不確かなところが多すぎる。この「研究」というのは、レム睡眠の発見そのものを指すのか（だとすると、少し誤りがあるように思う）、断眠実験のことなのか、はたまたナルコレプシー等の睡眠障害の研究を指すのだろうか？ディケンズと眠りの関係に強い関心を持つ評者はとても気になるのであるが、残念ながらこの点については註も何もない。この例にも見られるように、註や、あるいは例示によってさらなる解説が必要と思われる場面で、それらが全くなされないというケースが目立つのは、読者にまったく優しくないと感じさせられた。

本書は、一つ一つの言葉に対する着目に根ざした、非常に興味深い論考である。だからこそ、もう少しその根拠を裏打ちして読者に納得させるような作業を行っておくべきではないかと強く思う。「感覚的に」言葉をとらえ、非常に鋭い読みを発揮する一方で、時として一人で「舞い上がり」、あらぬ方向に向かって飛び立っている、というのが、表題に即した率直な感想である。





Ina Zweiniger-Bargielowska,  
*Managing the Body: Beauty, Health, and Fitness in Britain,  
1880-1939*

(xii+394 頁, Oxford: Oxford University Press, 2010 年 11 月)

ISBN: 9780199280520

(評) 川崎明子

Akiko Kawasaki

『大いなる遺産』でピップが二度目に満足荘を訪問する場面を思い出していただきたい。ハヴィシャム嬢の「私を歩かせなさい」という命令に、ピップは言われるままに肩を貸し、部屋の中をぐるぐると歩き回る。ハヴィシャム嬢は「身体があまり強くなく」、まもなく「もう少しゆっくり!」とピップに言うが、速度は弱まるどころか勢いを増すばかりで、財産目当てにやってきた親戚たちの挨拶にもその歩みは止まらない。エステラとトランプ遊びをした後屋敷の外に出ると、「青白い顔の若紳士」がどこからともなく現れ、一戦を申し込んでくる。試合が始まってみれば、若紳士はそれなりに敏捷でも、腕力はピップにかなわずまもなく降参する。満足荘の敷地を出ようとしたところ、エステラが「何か嬉しいことでもあったかのように」顔を紅潮させながら待っていて、「したいならしてもいい」と言っキスをさせてくれる。

この場面を次のように解釈することは可能であろうか。ハヴィシャム嬢は親戚たちにあっさり遺産を渡すくらいならせいぜい長生きしようと、屋敷に引きこもりつつも身体を鍛えており、さらにその事実を親戚たちに見せつけている。青白い顔をしたハーバート・ポケットは、より健康になるべく普段から拳闘にいそしみ、適当な相手を見つけては実戦で腕を磨いている。エステラが頬を染めているのはピップの身体能力に興奮したせいで、高飛車な言葉でキスを許可するのも、強い男と判明したピップに本当は自分がキスをしたいからである。この一連の場面に存在するのは、自分の身体を鍛えたいという願望と、強い身体を持つ他者への賞賛なのだ。

Ina Zweiniger-Bargielowska の新しい著書を読んだ後ならば、このような解釈が一瞬頭によぎってもおかしくない。本書は、第一次ボーア戦争から第二次世界大戦開戦までの期間における、身体管理、健康促進、スポーツ文化を考察するものである。この期間の身体をめぐる理想は、ギリシャ・ローマ時代の「健全な精神は健全な肉体に宿る」であった。イギリスにおいて、国民の健全な精

神の重要性を認めない時代はなかつただろうし、健全な肉体の重要性を認めない時代もなかつただろうが、その二つが組み合わさり、一方が欠けてはもう一方も成立しないとして一緒に推進されたのがこの時代の特徴である。そして人間の美しさは、人工物に頼ることなしに、心身両方の健康から自然に生まれ出ると考えられ、結婚市場はもちろんのこと、労働市場においても強みとなった。写真が一般的になってからは、アスリートたちの鍛え上げられた肉体の写真が雑誌に掲載されて広く出回り、美しく健やかな身体のイメージが、具体性と説得力をもって追求されていく。ついには身体を管理することは、良き市民の義務とまで見なされるようになった。

身体管理を重視することの発端は戦争であった。戦争に勝ち、大英帝国を維持・拡大するには、強い兵士が数多く必要だ。しかし実際兵士を募って検査してみれば、身体が弱くて兵役に就けない男たちが数多くいることが判明した。愕然とした政府は国民の健康管理に本格的に乗り出す。そこにスポーツ文化を普及しようと企む運動選手たちや、もともと国民の健康管理に従事してきた医師や公衆衛生の関係者が加わって、上からも下からも国民の健康を向上させる運動が展開された。この後兵士の身体は、国民全体の健康の指標として注視され続けることになる。そもそも一体どうしてイギリスの男たちが弱くなってしまったかといえ、都市化により自然と縁遠い生活をするようになったこと、就業形態の変化によりオフィスでの座業が増えたこと、交通機関の整備により歩く時間が減ったことなどが挙げられる。

健康を増進するために、主に食事、運動、服装の三つが重視された。まず食事に関しては、中産階級のホワイトカラーの男性の肥満や、若い女性の拒食症による痩せすぎが問題になった。太った男は良い兵士になれないし痩せすぎの女は生殖に差し障りが出ると考えられ、ひいては国家と帝国の弱体化に繋がるとして危惧された。肥満の人が努力して劇的に痩せた様子を綴った本もよく売れた。ちなみにこの減量成功記の流行は、ヴィクトリア朝末期以降のセルフ・ヘルプ本とでもいうべきものが、当時の消費文化と結合した現象であるといえよう。健康でしかも安価であるとして、肉食主義の人气が高まり、ロンドンにはベジタリアンレストランが増えていく。野菜がもてはやされるようになった一因でもあるが、数ある栄養素の中でもビタミンが重要視されるようになる。またアルコールは健康を害するとして、節酒・禁酒が謳われた。

次に運動だが、デンマークやスウェーデンなど北欧諸国でメソッドが確立された体操やボディビルディングに加えて、ハイキング、水泳、キャンプ、自転車などが奨励された。戸外での運動が数多く推奨されたのは、日光浴が健康的であると認識されたからである。運動の伴わない日光浴も効果があるが、自

然の中で日光の恩恵を受けるべくなるべく肌を露出して身体を動かすことが一番であると考えられた。運動選手自らが本を書いたり弟子を育てたりして、習慣的に運動することの普及に携わったのも、新しい傾向である。運動に関してはまだ男女が区別され、水泳もキャンプも男女別に行われることが多かった。都市部には現在と似た形態のスポーツクラブができ、女性専用のクラスも用意され、人々は会員登録して週に数回就業後に運動をした。男子の体操などのトレーニングにおいては、もともと運動が良き兵士の育成を目的として推奨されたことを反映して、本物の軍隊の訓練が取り入れられることも多かった。さらに、スポーツクラブに足を運ばずとも自宅でトレーニングができる運動器具も販売された。

最後に服装だが、服装は二つの点で健康にとって重要であった。第一は、衛生的であるかどうかという点で、頻繁に洗濯できる素材や形状の服が提案された。もちろん服装以前に、入浴して身体を清潔に保つことも大切であった。第二は、身体への負担が軽いかどうかという点で、身体を締め付けない形態の服を着ること、軽い素材で作られた服を着たり着る枚数を減らして身につける衣服全体の重量を減らすこと、帽子を被らないこと、足下には歩きやすいサンダルを履くことなどが提案された。女性の服装の方がずっと早い時期に、緩く軽いものとなっていたので、男性の服装改革者たちはこの点で男性は女性に倣うべきだと主張した。とはいえ、女性の身体は拘束や重みから真に解放されたわけではない。ヴィクトリア朝のコルセットが廃れたかわりに、女性の服のシルエット全体がだんだんと細くなっていき、細身の最新ファッションを着こなそうとダイエットに励んだ若い女性には、拒食症に陥る者もいた。日常着のみならず運動着も、身体に負担が軽いものに改革されていく。そもそも健康向上のために運動を行うのであるから、その際の服装も身体に優しいものであるべきであった。しかし水着だけは、セクシュアリティの露出と関わるために、機能性を優先したものになるには時間がかかった。

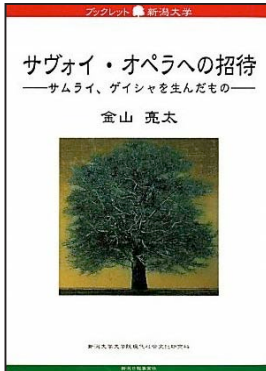
このような健康管理の文化には、面白い副産物もあった。一つは、健康の向上という目的のために、国家主義や人種差別主義を越えて異文化が積極的に受容されたことである。イギリスで運動の効用を説いた元運動選手には、北歐を主としたヨーロッパ大陸やオーストラリアの出身者が多かった。アフリカや太平洋諸国の土着の人々の簡素で滋養に富む食事や、伝統舞踊や伝統競技も、イギリスでも取り入れるべきものとして紹介された。ちなみに日本の柔道もその一つである。もう一つの副産物は、健康という同一の理想を掲げることにより、階級差が不問に付される傾向があったことである。例えば、肉食主義は健康的とされたのみならず実際のところ安価であったために、金持ちにも貧乏人にも

それぞれの魅力を持ちえた。また優れた運動選手として認められるためには、出身階級や人脈よりも、コンテストでの優勝といった実績や、セミヌード写真にうつった具体的な肉体が物を言った。

冒頭の『大いなる遺産』の場面に戻ろう。上で紹介した本書の内容を念頭にこの場面を再考すると、先ほどの解釈が成立しないことが分かる。体力をつけたいならば、ハヴィシャム嬢は日光を浴びながら庭で運動をするだろうし、そうして得た健全な肉体には、もう少し健全な精神が宿っているはずである。ハーバートはボクシングをすることで顔色が良くなり、力もついているはずである。ピップは自分の腕力を認識し、自分が強い男であると同時に健全な市民でもあることに自信を持ち、エステラにあれほどの劣等感を抱くこともないだろう。

本書はディケンズの没年の10年後からの時代を扱っているのですが、ディケンズ小説にはないものを論じている。しかしディケンズの小説にないものが見えることで、さもなければ気づかないようなディケンズ小説の特徴が浮き上がってくる。例えばディケンズ小説には「健全な精神は健全な肉体に宿る」という概念がない。『大いなる遺産』では、善人ハーバートも奇人ハヴィシャムも同様に身体が強くない一方で、罪人らしきモリーや暴力夫ベントリー・ドラムルは力持ちである。また、運動は健康に直結しない。『荒涼館』のダンス教師プリンス・ターヴィードロップは、過労で倒れる寸前である。『ハード・タイムズ』に登場するサーカスも、高い身体能力の表現というよりは自由な想像力の象徴として機能する。運動が健康に直結しないだけでなく、現代の基準では明らかに不健康な状態が病的に描かれることもない。『ピクウィック・クラブ』のジョーの肥満と過眠は、現代ではピクウィック症候群と呼ばれるものだが、小説の中では危惧の対象としてではなく笑うべきものとして描かれている。食物に関しても、『クリスマス・キャロル』のクラチット家の貧しいながらも楽しい食事が表すように、栄養素やカロリーよりも、食卓を囲む家族の団結や、食卓を中心とする家庭という場そのものが尊重される。このように本書は、19世紀末から20世紀前半の身体文化にまつわる情報源として役立つのみならず、ディケンズをはじめ1880年以前に活躍した小説家の小説についても、陽画ではなく陰画という形で新鮮な視点を与えてくれる。

著者 Ina Zweiniger-Bargielowska は英国史の専門家で、現在イリノイ大学教授。 *Austerity in Britain: Rationing, Controls, and Consumption, 1939-1955* (2000) で British Council Prize を受賞。



金山亮太, 『サヴォイ・オペラへの招待 — サムライ、  
ゲイシャを生んだもの』

Ryota KANAYAMA, *Invitation to the Savoy Opera*

(70 頁, 新鴻日報事業者,

2011 年 1 月, 本体価格 1,050 円)

ISBN: 9784861324321

(評) 新井潤美

Megumi ARAI

イギリスのダービシャーにバックストーンという町がある。ここは鉱泉が湧き出るので、スパ・タウンとして知られていて、「バックストーン・ウォーター」というミネラル・ウォーターの産地でもある。一方、バックストーンというと、水ではなくて「サヴォイ・オペラ」を思い出す人もいるが、それはかなり熱心なサヴォイ・オペラ・ファンだろう。バックストーンは国際ギルバート・アンド・サリヴァン・フェスティバル (International Gilbert and Sullivan Festival) の開催地であり、毎年八月にイギリスだけではなく、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどの英語圏から、サヴォイ・オペラを上演するプロフェッショナルおよびアマチュアの団体、そしてサヴォイ・オペラのファンが集まり、3 週間ばかり、この町のオペラ劇場やその他のホールでサヴォイ・オペラが上演され、各種のイベントが催されるのである。

「サヴォイ・オペラ」の通称で知られる、劇作家 W・S・ギルバートと作曲家のアーサー・サリヴァンが組んで作った一連のコミック・オペラはイギリス文化の中で独特の位置を占める。学芸会でおなじみの演目であり、イギリス文化の重要な部分とみなされている一方で、「サヴォイ・オペラ」が好きだと公言することは時と場合によっては勇気がいるし、「サヴォイ・オペラ」ファンは「ミドル・クラスでミドル・ブราวでミドル・エイジ」といった、一つのステレオタイプが存在する。さらに近年では人種差別的であるとか、女性蔑視的であるとか、スノビッシュであるなどの批判を受け、イギリスの公立学校ではあまり歓迎されていないのが現状のようだ。ロンドンの劇場でも上演されることは少なく、ロイヤル・オペラ・ハウスで上演されることもほとんどない。一方では「イギリスの伝統文化」と言われながらも、「サヴォイ・オペラって何?」という人も多い。

実際、サヴォイ・オペラとは何なのか。金山亮太氏の『サヴォイ・オペラへ



の招待』はそれを見事に解き明かしてくれる。これは新潟大学大学院現代社会文化研究科から刊行されている、高校生向けの「ブックレット新潟大学」の一冊であり、70ページばかりの短い本だ。副題が「サムライ、ゲイシャを生んだもの」とあるから、サヴォイ・オペラの中で今でももっとも人気のある『ミカド』にのみ焦点を当てた解説書かと思うと、そうではない。

第一章「サヴォイ・オペラとは何か」では、ギルバートとサリヴァンについての解説、サヴォイ・オペラの作られた背景などが分かりやすく説明されているが、それだけではない。シェイクスピアまでさかのぼって、イギリスの演劇とその受容、イギリスにおけるオペラ受容、イギリス的オペラの台頭、さらにエドワード・リアやルイス・キャロルのナンセンス・ライムズに目をむけながら、著者はヴィクトリア朝の中産階級の観客にサヴォイ・オペラがあれほどの人気を得た理由を分析する。サヴォイ・オペラについて書かれた英米の解説書の多くがヴィクトリア朝の文化や社会的背景にのみ目を向け、そこから出ることがないのに比べて、本書はより大きなパースペクティブの中でサヴォイ・オペラをとらえ、イギリス文化におけるその位置を明確にする。著者は「本格的オペラほど肩が凝(こ)らず、大衆演劇よりは品の良い音楽劇はないものか。でも、古典劇や仮面劇には興味がないし、今さら一から外国語を勉強する気もない。こういった新興中流階級の核をなしていた人々こそ、のちにサヴォイ・オペラの支持者となったのでした」と、サヴォイ・オペラの観客を実に簡潔に、少々辛辣に定義するが(10-11頁)、一方で同時にこういった、ミドル・ブラウの人々に対して、「彼らは変に知ったかぶりや背伸びをするのではなく、自分たちに評価可能なものだけを受容する、いわば「等身大」の生き方を好んだのでした」という肯定的な評価を添えることで(9頁)、バランスを保っている。特に日本の高校生を意識した本書において、このようなアプローチのしかたは重要であり、サヴォイ・オペラを「イギリスの伝統文化」としてひたすら誉め上げるわけでも、あるいは反対に「偏狭なミドル・クラスの文化」として批判して、‘patronize’するわけでもない。きわめて「公平」かつ客観的な視点から書かれているのである。

第二章「ナンセンスな笑いと世相風刺」では通常サヴォイ・オペラの第一作目とされる『陪審裁判』をはじめとするいくつかの作品が取り上げられ、その簡単なあらすじと特徴が述べられている。また、ギルバートとサリヴァンのパートナーシップに伴った問題や苦悩が書かれているが、ここでも、サリヴァンの「真面目な」作曲とギルバートの「ナンセンスな脚本」とのミスマッチという、サヴォイ・オペラの一番の特徴とされる点について、「本場ヨーロッパの作曲家たちにも負けないほどの技量をサリヴァンが発揮し、それがイギリス



人好みのナンセンスな筋立てによって台無し（という表現が刺激的過ぎるのであれば、浪費されるとでもいいでしょうか）にされるのを当時の観客は密かに喜んでいたようにすら見えます」と指摘し（31頁）、それを「先進的な大陸文化に対するイギリス側からの陰湿な復讐ふくしゅうと見ることも可能です」と興味深い解釈を加えている（31頁）。

このように本書はサヴォイ・オペラについての基本的な情報を提供し、限られた字数の中できわめて的を射た、明快な解説をしているだけでなく、従来の解説書とは違った視点からの分析や解釈をも盛り込んでいるのである。さらに第三章『『ミカド』と日本』では、サヴォイ・オペラで今でも最も人気があると言えるこの作品が生まれた経過や、ロンドンの「日本村」の説明に加えて、当時のイギリスにおける日本の知名度を、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』や、*Quarterly Review* の記事といった多様な例を挙げながら解説している。その上で、『『ミカド』の中の日本は、日本という国のパロディーですらなく、虚構の日本という記号の上に、さらに屋上屋を架すがごとき操作によって作られたものであり、むしろ仮想現実的空間として彼らが割り切って楽しんでいたと考えた方がよいでしょう」と説明するのだが（48頁）、さらに、この「仮想現実的空間」であった『ミカド』の日本が、その人気故に結局は「今日の西洋人の日本イメージに根強い影響を及ぼしている」ことを指摘するだけでなく（54頁）、現代の日本自身が、そのイメージに「すり寄って」いる現象を提示している。

そして第四章「ノンポリの政治性」においては、著者はまずアメリカ、そして南アフリカにおけるサヴォイ・オペラ愛好演劇集団の分布に目を向け、「一見したところは日和見主義のお気楽な」サヴォイ・オペラが「今やそれが上演された当時のヴィクトリア朝人たちの自己イメージを反映したものとして、ポスト植民地時代を生きる現代イギリス人に歴史観の再検討を迫る」存在として、その受容とイメージの変遷、そして現代イギリス文化におけるその位置を明らかにするのである（57頁、66頁）。

本書はこのようにサヴォイ・オペラに関する基礎知識、背景、ステレオタイプをわかりやすく説明しながら、イギリスの社会、階級、演劇、音楽、アイデンティティなど、じつに様々な要素を解説している。冒頭で述べたように、「高校生向けの解説書」という本書の趣旨と限られたページ数という制約を受けながらサヴォイ・オペラのエッセンスを押さえ、さらに新しい視野と見解を提供する著者の手腕には感銘を受ける。次はぜひ full-length のサヴォイ・オペラ論を期待したい。



山本史郎, 『名作英文学を読み直す』  
 Shiro YAMAMOTO, *Re-reading the English Masterpieces*  
 (講談社選書メチエ 492,  
 294 頁, 講談社, 2011 年 2 月, 本体価格 1,800 円)  
 ISBN: 9784062584937

(評) 宇佐見太市  
 Taichi USAMI

日本英文学会の國重純二会長(当時)が「英文学会の活性化について」と題する巻頭言を「ELSJ Newsletter」No. 90 に載せたのは、今から 11 年前(2000 年)のことである。國重氏は、日本の英文学研究界不振の現状を顧みて、「憂慮すべき事象」と認識し、活路を開くべく試案を提示した。最近では言語学者・大津由紀雄慶應義塾大学教授が、編著書『危機に立つ日本の英語教育』(慶應義塾大学出版会, 2009)のなかで、かつては英語学や英米文学を対象とした本流の英文科が今やコミュニケーションの隆盛によってすっかり衰退してしまったと慨嘆する。約 45 年も前の話だが、ジョージ・スタイナー著『言語と沈黙』(Faber & Faber, 1967)に拠れば、英文学の本場イギリスにおいてさえ英文科は停滞気味で、閉塞感が漂っているとのことである。こうした局面を打開するためにはどうしたらよいかと苦悶するジョージ・スタイナー氏は、古典を主とした良書を読むことに尽きると言う。

こうした状況下、日本の英文学界の活性化のために大学人として身命を賭して実践活動に勤しんでいる英文学者がいる。その人の名は、山本史郎、東京大学大学院教授である。山本氏は、日本の英文学研究界が凋落の気配を見せ始めた 2003 年の時点で既に、「テキストの産婆術—物語 J.R.R. Tolkien, *The Hobbit*」(斎藤兆史編『英語の教え方学び方』東京大学出版会所収)を公刊し、その論考のなかで、精緻な文学テキスト読解作業こそが「一つの理想的な英語教育といえるのではなかろうか」と述べ、語学教育は文学テキストを読みとる授業以外の方法では不可能ではないか、と断じた。山本氏のこのような英文学研究に対する姿勢は、2008 年発行の著書『東大の教室で「赤毛のアン」を読む』(東京大学出版会)においても終始一貫しており、「文学研究の脈はまだまだ掘り尽くすことはできない」という確たる信念のもと、「何が文学的コミュニケーションを成り立たせているのか」という問いかけは、わたしにはとても魅力的だ」と真情を吐露しつつ、山本氏は、「作品そのものの言語表現を緻密に調べると

いうプロセスをへて論理的に」作者の意図に迫っていきたいと持論を展開している。かつて批評界で一世を風靡したニュークリティシズムやロラン・バルトの「作者の死」の存在を認識したうえで、あくまで山本氏は、英語学の語用論等をも駆使しながら文学テキストに密着し、「作者と読者のあいだ、あるいは読者同士のあいだで」成立する「文学的コミュニケーション」に肉薄していく。

低迷気味の日本の英文学研究界にあって、英文学と英語教育との有機的な融合をみごとなまでに日々の授業や公開講座等において実践し、それらの活動成果を活字にして世に問うてきた山本史郎氏は、このたび満を持して、『名作英文学を読み直す』（講談社選書メチエ、2011）を上梓した。

自然科学的な客観的論述を善しとしがちな日本の人文科学の学統は、これまで数多くの国籍不明の英文学研究書を産み出してきた。軸足をどこに置き、誰に向けて執筆しているのが皆目わからないという学術専門書がアカデミズムの世界では主流を占めてきた。日本語で書かれているゆえ、てっきり軸足は日本に置き、日本の読者を対象としたものかと思いきや、何度読み返してもそれが不明であるといった、地に足がついていない不毛きわまりない学術研究論文を私たちはいかにたくさん読まされてきたことか。しかるに山本史郎氏の一連の仕事とは言えば、彼ははっきりと「日本の読者」に向かって、それも主として学術研究者が好むであろうアカデミズムの装いを敢えてかなぐり捨てて、「読者フレンドリー」に徹して、生氣のあるわかりやすい言葉で懇切丁寧に執筆するという態度を貫き通している。とりわけ今回公刊された『名作英文学を読み直す』は、白眉である。

本書の「はじめに」のなかで、「こりゃひとつ英文学を研究してみなければと一念発起してくだされば、こんな嬉しいことはない」と著者は憤み深く述べているが、本書はまさに、現在いくぶん停滞気味の日本の英文学研究界にとっての貴重な生命の水の役割を果たしており、英文学界に新風を吹き込む、まさに起死回生の起爆剤にもなりえている。「日本語ばかりの、縦書きの本」ゆえに英文学研究者の目には、日本の一般読者を対象とした、世間によくある手軽な概説書のように映るかもしれないが、実は本書は、幅と奥行きとがたっぷりとある、重厚な上質の良書である。たとえ少数であれ、今後日本において英文学研究を志さんとする若い世代のエンパワーメントに本書の果たす役割は大きい、と私は確信している。もちろん将来の英文学徒にとってだけでなく、今、英文学研究者兼英語教師として教室で英語の授業を担当している私のような大多数の日本の大学英語教師にとっても本書は、非常に有益であり、自信喪失に陥っている英文学専攻の英語教師に一条の明かりを示してくれている。著者山本氏は、まさしくわれらが救世主である。

私が依頼された書評の掲載誌がディケンズ・フェロウシップ日本支部発行の『年報』ということもあり、大部の本書の中からひとまずディケンズに関する山本氏の叙述に目を向けてみたいと思う。第3章で、『クリスマス・キャロル』(1843)が登場する。‘There’s more of gravy than of grave about you, whatever you are!’というスクルージの台詞を取り上げ、gravy と grave の音の近さから生じるジョークについて、既刊の翻訳書からの訳例を挙げつつ、著者は独自の所見を披露する。原文の意味も音もとりあえず無視しながらも、音が似た二つの日本語を探し出し、日本語のジョークとして通じるものを新たに創造する山本氏は、「何にしても、あんた、＜恨めしや＞より、裏の飯屋に縁があるぞ!」と訳出し、漢字「恨」には「うら」というルビを、また、「飯屋」には「めしや」というルビをふることで、語呂合わせを強調している。そして、それぞれが食べ物と幽霊に関連していなければならないという原作の英文をもきちんと押さえた訳にしている。ディケンズは読者を笑わせようとして『クリスマス・キャロル』を書いたにちがいないという解釈を採る山本氏は、「作者の意図の等価」、「レトリックの等価」そして「効果（読者の反応）の等価」を重要視して、敢えて「意味の等価」と「音の等価」を無視した訳を創出した、と言う。翻訳の要諦は「意味」以上の等価をいかに文学作品の翻訳に反映させていくかということだ、と確信する山本氏の面目躍如たる名訳と言えよう。これらの記述を通して私たち読者は、山本氏の翻訳に寄せる熱い想いははっきりと見て取ることができる。

続いて山本氏は、第7章で『荒涼館』(1853)を真正面から取り上げている。「解釈の解剖学」、すなわち、「文学作品のある一定の表現や構造が、読者の心の中に一定の意味や解釈を生じさせるダイナミズムを明らかにすることが、少なくともわたしにとっては何よりも重要だし、面白い」と語る山本氏は、己の信条に即して作品『荒涼館』の深部に迫ってゆく。「チャンスリーがこの小説の意味の中核にある」と論じたうえで、チャンスリーに言及した過去の5人の批評家（プリムリー、チェスタートン、エドモンド・ウィルソン、エドガー・ジョンソン、Q・D・リーヴィス）の各解釈を列挙し、「エドモンド・ウィルソン以降の批評家たちは、『荒涼館』に描かれたチャンスリーに、……実際に存在した裁判所というより、象徴的な意味合いを読み取ろうとしていることが分かる。しかも、時代が下るほど、より一般的な意味合いをチャンスリーに読み込んでいるのがとても面白い。……まったく同一の対象を解釈しながら、どうしてこれほどまでにその意味合いが変わるのだろうか」と述べ、『『荒涼館』の批評史の中で、なぜこのような大転換が生じたのだろうか？このような転換が起きるに際して、どのようなメカニズムが作用していたのだろうか？—こ

れがわたしの逢着した、大きな疑問だったのである」と続ける。そしてチャンスリーの存在を読者の目の前に鮮明に浮かび上がらせる、たとえばチャンスリーのメタファーとしてのクルックの店や、チャンスリーの感覚的等価物としての霧などに触れ、「比喩が意味を創造し産出している」と詳述した後、山本氏は、「チャンスリーはブラックホール」と言い切る。

チャンスリーは実体が欠如しており、解釈を牽制し束縛する要素がほとんどない空虚な器ゆえに読者はそれを意味で満たそうとするのだと言う山本氏は、物語の中心にブラックホールを捉えるという、このようなディケンズの小説作法の影響を大きく受けた作家として、『変身』（1915）などの寓意的な物語で有名なフランツ・カフカの名を挙げる。そしてさらに、カフカのそのような物語の誕生によって今度はディケンズの『荒涼館』の寓話的解釈に拍車が掛った、と論述する。時代を超えた両作家の不可思議な関連性についての山本氏の犀利な説明は、私たち読者に新たな感興を呼びさまし、英文学研究の面白さに豁然と目を開かせてくれる。これらが、アカデミズムの枠を超えた軽妙洒脱で当意即妙の文体によって伸びやかに綴られているのが心憎い。

ディケンズ以外の他の作家の作品群に山本氏がどのような光を当てているかを順次、検証していきたい。第1章のバーネット著『秘密の花園』（1911）に関して山本氏は、「インターテクスチュアリティ」の観点から作品を解きほぐしていく。この作品には過去のさまざまな文学作品が織り込まれていると主張する山本氏は、具体的には、シャルル・ペローの「まき毛のリケ」（1695）、シェイクスピアの『リチャード三世』（1592）、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』（1847）、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』（1847）、ディケンズの『大いなる遺産』（1861）、そしてさらにはイーディス・ネズビットの『魔法の城』（1907）の名をも挙げている。時間の凝固の必然の帰結としての精神の凝固を体現している館の主人クレイヴン像にはディケンズの『大いなる遺産』のミス・ハヴィシャム像という先人がいたという情報を、山本氏は私たちに教えてくれる。「作品と作品との間隙を想像で埋めていくほど楽しいことはない」と述べる山本氏にとっては、インターテクスチュアリティのアプローチこそが文学を学ぶ醍醐味のようなものである。そしてこのアプローチこそ、明治以来の先達の手法である。明治以降の錚々たる英文学者の仕事は、インターテクスチュアリティという用語こそ使わなかったが、和漢洋を問わず、古今東西のありとあらゆる作家・作品を網羅した重厚なものだった。山本史郎氏は、その学統をしっかりと受け継いでいる。

第2章はデフォーの『ロビンソン・クルーソー』（1719）論である。「この物語が書かれた時期が、まさに現代社会につながる消費文化の幕開けと重なり合



っていた」と指摘し、「モノが好きなデフォー」は、同時に、時間と空間の特定に執念を燃やし、細部にとことん拘ったと言い、その逆の、ディテールに関心が無かったジョナサン・スウィフトと比較する。イギリスにおける「小説」誕生の背景が手に取るようにわかる秀逸な章である。

第3章はトルキンの『ホビット』(1937)に関してで、トルキンの「韜晦テクニック」で書かれた難解な作品をどう翻訳するかという秘術を、山本氏は読者に伝授してくれる。「翻訳者自身が分かったからといって、すべてを白日のもとにさらそうとしてはならない。読者に正しい解釈を教えるのではなく、その方向をそれとなく教え、読者が自力でそこにたどりつける言語的なお膳立てをしてあげなければならない」という言説には、これまで数々の翻訳を世に出してきた実績のある山本氏だけに、千鈞の重みがある。

第4章のモンゴメリーの『赤毛のアン』(1908)については、村岡花子の翻訳との比較がひときわ光っている。村岡版『赤毛のアン』が原書の第37章を大幅に簡略化している謎を山本氏は追う。その結論として山本氏は、大人の心の成長というテーマの色合いを薄めてシンデレラ物語に取って替わることによって、日本の若年の読者に理解しやすくさせたいという狙いが村岡にはあったに違いないと、断ずる。文学作品を「読む」という行為の本質に迫る考究である。

第5章は、史実を踏まえつつ、アーサー王伝説にまつわる芳醇な定見を満載した章である。章末の「様々な時代と、時代が紡ぎ出した物語を検証する仕事は興味尽きない。文学研究をめざす者よ、沃野は我らが足下にひろがっている！」という著者の魂の啓培に、私たちは真摯に耳を傾けたい。

第6章は、シェイクスピアの『マクベス』(1606)が、その後、さまざまな演出や表現媒体によってどのように姿を変えていったかを踏査する、示唆に富む論究である。マクベスとマクベス夫人に関する20世紀以前の解釈と、それ以降の解釈との相違について著者は詳述する。そしてさらに、黒澤明監督の映画『蜘蛛巣城』(1957)と蜷川幸雄演出の演劇『マクベス』(1980年初演)にも触れ、黒澤の『蜘蛛巣城』は現代という時間の額縁でかこわれた過去の物語として作られているため無常感が前面に出ているが、それに比して蜷川の『マクベス』は仏壇という額縁に置きかえることによって、過去の時間を封じ込め、現世の生に執着する野心のドラマを生み出したのだ、と山本氏は言う。本章は、著者の私的な観劇体験をベースとした、読む人の心に静かに染みしてくる雄渾な筆致が冴えわたっている。

かつて福田陸太郎氏は、『英語青年』(研究社、1977年3月号)誌上で、サイデンステッカー訳『源氏物語』(1976)を好意的に紹介したが、その時点で



は予測できなかったことを32年後に平川祐弘氏は、「地球化時代の英語学習と『源氏物語』の邂逅」(『諸君!』2009年4月号所収)と題する論考で、『源氏物語』はレイブの文学だという米国人の非難の源はサイデンステッカー訳に依拠しているのではないかと指摘している。これは翻訳の及ぼす影響力の大きさを実感させる秀でた論評である。このことに山本史郎氏は本書で言及してはいないが、翻訳に寄せる山本氏の信条は、すぐれて知の人である平川氏のそれに通底するものがある。

米原万理氏(ロシア語通訳者・作家・エッセイスト)の「文学こそがその民族の精神の軌跡、精神の歩みを記したもので、その精神のエクスである」(『米原万理の「愛の法則」』, 集英社新書, 2007)という至言や、中西輝政氏(国際政治学者)の「英文学への強い関心を抱きつづけてきた近代日本の知識人が、この<イギリスの知恵>には一貫して冷淡あるいは無関心でありつづけてきたのは驚くべきこと」(『国まさに滅びんとす』, 集英社, 1998)という箴言を肝に銘じて生きている大学英語教師の私は、このたびの書評執筆を通じて、山本史郎氏の本書のなかに日本の英文学徒が理想とすべきひとつのありようを見た。リービ英雄や水村美苗が「精神世界の探求をになう専門の言語たる文学言語」(土田知則・青柳悦子著『文学理論のプラクティス』新曜社, 2001)に向き合うのと全く同じ態度で臨む山本史郎氏の労作は、時代の課題をしっかりと受け止めた、まさに言語の研究と文学の研究のみごとな統合である。高邁な学問的精神に支えられ、簡潔にして達意の文章で綴られた本書が、明日の日本の英文学研究界を牽引することを信じてやまない。





松村昌家『文豪たちの情と性へのまなざし 逍遙・  
漱石・谷崎と英文学』

Masaie MATSUMURA, *Passions and Sexuality as Literary  
Concern to Shoyo, Soseki, and Tanizaki: Vein of English  
Literature in the Three Masters*

(285 頁, ミネルヴァ書房, 2011 年 3 月, 本体価格  
3,675 円) ISBN: 9784623058754

(評) 梅正行  
Masayuki TOGA

今世紀も数年ほど経ったある春の夕方。ヒーロー空港で搭乗を待っていると、ある方のお姿が目にとまり、ある方と私は、ほぼ同時に声をかけ合った。ある方とは松村先生（書評ながらここでは敬称略さず）で、当地で研究を終えての帰路とおみうけた。他方、評者は放浪しての帰路だった。半分は私事のような話を出したのは、そもそも文学というのは個人的事情抜きには語れない私事の総体が、私小説という限定的な意味とはまた別の次元で、何かの具合で、芸術となったもの（ここですでに評者は著者のリットン論の一部を我流で咀嚼）と日頃から思っていることが、また、外国の空港で松村先生をお見かけすることとディケンズ・フェロウシップの会員の業績に、逍遙、漱石、潤一郎の名を見出しうるということとのあいだに、ある種の類似点を感じ取ったことが関係している。

個人作家の名前を冠する学会で、あるいはその周辺で研究を進める場合、いわゆる若手であれば、その作家以外のことを話題にするには多少の勢いがある。畢竟、若いときの書きものは、だんだんとタワーのような形状になりがちだ。ごく狭い対象に関し、これだけ調べましたという発表や論文をますます目にするようになった昨今、また、一部に画像偏重の傾向著しい昨今、山のかたちのどっしりした書き物が貴重に思えてくる。

タワー型が悪いというのではない。本書中の谷崎にあやかって、ひとつつくりばなしをしよう。ディケンズが借りた家の家賃の支払いに関する書類が、ジェイン・オースティンの『ノーザンガー・アビー』のキャサリンの例の発見物よろしく目の前にあるとする。それはそれでディケンズのなにながしかを語ろうが、およそ研究に対する一種の最終兵器的質問である「それがどうした？」という問いの前には、その手の資料を駆使した研究成果とて、よほど熟達した人の手にかからぬかぎり、もろくも崩れ去る。当今の電気代の請求書でさえ、この日本の現代社会のなにながしかを語る。それが作家の家の電気代の請求書であ

ればなおさらのこと。しかし、ディケンズ生誕二百年にちなんで言えば、今から未来の二百年以内のある時期に、他国の研究者が現代日本の作家の電気代の請求書を発見して嬉々としていたら、われわれの子孫である同時代の日本人は「もっとほかにすることがあるのではないか」と口に出さずとも、思うのではなからうか。フーコーのようにはいかない。

その昔、ダウティー・ストリートのディケンズ・ハウスに出かけ、どうしても、作家の机とか椅子とか、その他の備品に関心がもてなかった。手紙にすらそうであったから、ディケンズ愛が足りないのかもしれない。そう思いつつも、清張、遼太郎、康成、潤一郎、秋声といった作家の記念館が旅の途上であれば寄り、坂井市立丸岡図書館の一角にある中野重治の蔵書を眺めに出かけてしまうのだから、評者は研究方法の分水嶺の上で、引き裂かれているのだと思う。そうしたところには、作家たちの眼鏡もペンもおいてあるのだから。

それやこれやから、ここに取り上げる『文豪たちの情と性へのまなざし』を読むと安堵する。ただし、本書は同じ著者の、これも評者の好きな『明治文学とヴィクトリア時代』より、ものとしては持ちやすいものの、中身として、さらに重く、重い荷物を持ち上げては膝から崩れること幾度であったので、ここでは、本書を飲み込んで別の小さな書評世界をつくることかなわず、本書の属性列挙に甘んじたことを、告白しておく。

本書は、タワー型論文志向の研究者にともするとありがちな軸足を完全にイギリスに移すという姿勢を滲ますこととてなく、片足をイギリスにおきつつも、片足は日本においたままでよいということ、どこにも書いてはないが、その存在をもって語っている点で、本書の大多数である日本の読者の気を楽しませる。それは著者今に始まっての姿勢ではなく、その出版目録を見れば、一目瞭然。単に円高が進むというような理由ばかりでなく若者が海外で暮らすことも視野に入れ出した今、一度は、この種の分水嶺の前で、われわれは立ち止まって考えを整理しておかなければならない。

次に、固有名詞の面白さがある。ワープロで変換しても容易には出てこない名前と、「潤一郎」といった既知の名前が次々と出てきて、スリルがある。イギリスの作家についても言えることで、これは読んだ、あれもこれも読んでいないという作家の名前が次々と出て、ディケンズやエリオットを読んで、なんとなく飽和状態を感じるということが、無学の証でしかないことを思いしらされる。ただ、幸い、著者の論の展開は、こちらにあまり知識がなくともよくわかる。

大きな問題に目を移すと、「日本」の「近代」といった、ともすると人が使うに躊躇すらおぼえがちな用語が、著者によって、わりとさらりと使われている、しかも、それがまさに相応しいところで使われているところを見て、対象のスパンを長くとるときには、書き手もそれに見合うだけの時の経過を経験し

なければならぬと感じさせられる。ここではたと思いつくのは、若いころヴィクトリア朝というのはなんと長いことかと感じられたのに、歳をかさねると、それほど長くもなかったのではないかと思えてきたことだ。

次に本書の各所には、いたるところに、時空の広がりを感じさせる文章が出て来る。「いま—ここ」について書いていながら、読者に「いつか—どこか」を連想させるのだ。

さらにこういう本が東日本の著者からではなく、西日本の著者から出て来るところが、評者には面白い。日本の近代文学というのは東京の文学だから、東京に居ては、今度は時間を間にはさむという客体化上の操作でもほどこさぬかぎり、ときに近代文学が見えなくなるのかもしれない。

そしてこれは、あたりまえと言え、あたりまえの話だが、著者はつねに対象を自分の問題として書いている。近代に生きるひとりの人間の深刻な問題意識が最初から最後まで息苦しいほどにこちらに伝わって来る。著者の日本文学の読みには、日本文学が、そんなことはないのだが、瞬時にわかったと錯覚させてくれる何かがある。たとえば逍遙の読みについて。逍遙が英文学の読みを通じて小説改革を断行したこと。あるいは漱石の読みについて。教科書でさんざんお目にかかりいささか食傷気味のわれわれに、「ディケンジアン」の称号を著者が与えるとき、あの難しい顔をした文豪は、急におもしろい、どこにでも居そうな、それこそ、ディケンズ・フェロウシップの懇親会二次会でもお目にかかれそうなおじさんに見えてくる。むしろ大谷崎の読みについて。その「うそ」論は、ともすると、このときリトル・ドリットは、などと簡単に言ってしまうがちな自分をおおいに恥じ入らせる。

そしてもうひとつ。本書には日本の女流作家がほとんど出てこない。念のため索引を見たところ、「子」の字が見つかったが、それは「高浜虚子」だった。評者は、キプリング、ヘミングウェイ、主要作品を出したあとのナイポールのように男臭い作家を好むものの、職場では、ごく浅い理解ながら、オースティンもギャスケルもエリオットもウルフも読んだ。いや、読ませていただいた。本当はアナイス・ニンあたりを読みたいのだが、古典のほうが安全と安易な作品選びを繰り返してきた。それでもときおり、演習などで女子学生よりも「情」の面でごくまれに深い作品理解に到達していることに気づき、あわてて引き返したことすらある。ところが、著者は近代の女流作家の「情」をここで話題にしない。軸足を両国に交互におく。男性作家に限る。そうした明確な姿勢を示すことができるのは、著者成長の時代の影響ではなく、ぶれぬ著者から自ずと滲み出るスタイルなのか。ぶれないところが、僭越と承知で、とてもうらやましい。そして、本書にはぶれなさの源泉も惜しみなく示されている。

---

# Fellowship's Miscellany

---



## Dickens, Racism, and Chauvinistic Madness

Mitsuharu MATSUOKA



Comparing certain of Dickens's characters with those created by his occasional collaborator Wilkie Collins, Maria K. Bachman observes: "Unlike Dickens, Collins explores the inner psyches of his mental deviants, examining what it means to be cast as 'other' and relegated to the margins of society in Victorian England."<sup>1</sup> It could be safely said that some of Dickens's darker stories, such as "A Madman's Manuscript" in *The Pickwick Papers* and "The History of a Self-Tormentor" in *Little Dorrit*, are actually of equal psychoanalytic value. Yet it is probably true that Dickens is generally better at representing warped psychology and its roots in authoritarianism and worship of the powerful than he is at portraying marginal people driven into marginal environments. While he could see more clearly than most the flaws at

the heart of his society—was willing to expose some of them—he seems to have less clearly perceived the edges or beyond, and his work increasingly suggested a hesitancy to venture out there.

His last collaboration with Collins was "No Thoroughfare" (1867), in which Joey Ladle, the head cellarman of Wilding & Co., regards all the performers at the Wednesday concerts established for the patriarchal family as "a set of howling Dervishes" (act 1, *ATYR*, Christmas No., 1867). Originally, the word *dervish* referred to the Moslem equivalent of a monk or friar frantically performing such acts of ecstatic devotion as whirling dances (Figure 1). Later, the word came to be associated in Britain with any kind of wild behavior which suggested emotions spinning out of rational control. In fact, beneath the expression used by



Figure 1: “Whirling Dervishes” (ca. 1725–50), drawn by Jean-Baptiste Vanmour.

Ladle there lies that colonialist perspective which readily views other races, and foreign culture beyond its comprehension, as bordering on insanity. At the same time, such judgments could be seen to constitute an unconscious projection of a deep-seated sense of insecurity onto some feared and despised other. The racial chauvinism beneath Ladle’s viewpoint was common among Victorian people, and is typified in Dickens’s Mr. Meagles, who has “a weakness which none of us need go into the next street to find” (*LD*, bk. 2, ch. 17). Mr. Meagles obviously owes his name to *measles*, a highly contagious infection, and everybody’s weakness in *Little Dorrit* is in part a consequence of the social

disease of inherent chauvinistic madness entrenched in Victorian England. Through Mr. Meagles, Dickens exposes the hypocritical and self-delusionary bigotry which buttressed that society’s apparent self-assuredness.

It is worth examining, however, the extent to which Dickens as a citizen of that society, albeit a sometimes critical voice, manifested the same weaknesses of chauvinism and cultural insularity as his characters. In *Little Dorrit*, for example, a certain superciliousness is evinced in the narrator’s description of John Baptist Cavaletto’s distinctively Italian emphasis in speech as reflecting “a vehemence that would have been absolute madness in any man of Northern origin”



(bk. 2, ch. 22). Sabine Clemm claims that the weekly magazine *Household Words*, of which Dickens was an editor, “views Ireland as a colony of the British Empire, but the Irish actively resist colonisation and reject the subject status that is imposed on the natives of other colonies.”<sup>22</sup> Dickens appears to have concurred with that colonialist view. In “On Duty with Inspector Field” (*HW*, 14 June 1851), a vivid account of a nocturnal visit to the London slums with the eponymous inspector of the Detective Police, Dickens describes the poor London Irish as “maggots in a cheese.”

A little before *Little Dorrit*, Dickens wrote a satirical essay with the title “The Noble Savage,” an ironic attack on the idealization of the uncivilized man as a dominant theme in Romantic writings.

The essay was in part an acrimonious review of an exhibition of American Indian themed art (Figure 2) by George Catlin during its run in England:

To come to the point at once, I beg to say that I have not the least belief in the Noble Savage. I consider him a prodigious nuisance, and an enormous superstition. [. . .] he is a savage—cruel, false, thievish, murderous; addicted more or less to grease, entrails, and beastly customs; a wild animal with the questionable gift of boasting; a conceited, tiresome, bloodthirsty, monotonous humbug. [. . .]

There was Mr. Catlin, some few years ago, with his Ojibbeway Indians. Mr. Catlin was an energetic, earnest man, who had lived among more tribes of Indians than I need reckon up here,



Figure 2: “The War Dance by Ojibbeway Indians” (1855) by George Catlin.

and who had written a picturesque and glowing book about them. With his party of Indians squatting and spitting on the table before him, or dancing their miserable jigs after their own dreary manner, he called, in all good faith, upon his civilised audience to take notice of their symmetry and grace, their perfect limbs, and the exquisite expression of their pantomime; and his civilised audience, in all good faith, complied and admired. (*HW*, 11 June 1853)

This was not the only time Dickens revealed a superior and mistrustful attitude towards the American Indians. His capacity for racial intolerance was clearly demonstrated during the Indian Mutiny massacres of 1857. "Every day," argues Lillian Nayder, "accounts of Indian atrocities and examples of British martyrdom were reported in the British press: the sale of Englishwomen to Indians in the streets of Cawnpore, for example [*Examiner* (5 September 1857)]. Predictably enough, these accounts elicited calls for repression and retribution."<sup>3</sup> "The Perils of Certain English Prisoners" is a timely story Dickens coauthored with Collins soon after the Mutiny and his son Walter's departure for India with a cadetship obtained with the help of the wealthy philanthropist Angela Burdett-Coutts. The story voices the dominant view of the middle classes, whose pow-

erful influence on public opinion fostered an almost universal demand for bloody revenge against the mutineers. Although the setting of the story is shifted to Belize (formerly British Honduras, Central America), it is unmistakably a product of the colonialist mindset in which a supposedly civilizing center interacts one-sidedly with a periphery of supposed inferiors.

Dickens was a regular contributor to the radical intellectual journal *Examiner*, which played a significant role in the development of racist ideas in the Victorian era. He wrote in a private letter to Miss Burdett-Coutts a month after the *Examiner* had reported the Indian atrocities:

I wish I were Commander in Chief in India. The first thing I would do to strike that Oriental race with amazement [. . .] should be to proclaim to them, in their language, that I considered my holding that appointment by the leave of God, to mean that I should do my utmost to exterminate the Race upon whom the stain of the late cruelties rested [. . .] to blot it out of mankind and raze it off the face of the Earth. (*To Miss Burdett-Coutts*, 4 October 1857, *Pilgrim*, 8: 459)

Some of Dickens's journalistic writings, not least in the *Examiner* and *Household Words*, suggest the operation of a form of political unconscious with regard to race.

Dickens took a side in the complex interaction between the colonialist center and its notional margins, and in that respect he participated in a culture of aggressive self-deception. The middle classes would attempt to assuage their insecurity and guilt about otherness by interpreting the actions, manners, and customs of those others, strange and incomprehensible to them, as manifestations of a dangerous madness that needed to be dominated and controlled.

Dickens's sheer racism, it appears, remained little moderated up to his death and was even hardened by the Jamaica

uprising of 1865 (Figure 3). Witness, for example, Rev. Luke Honeythunder in *The Mystery of Edwin Drood*, the hypocritical London philanthropist and guardian of the Landless twins, "beautiful barbaric captives brought from some wild tropical dominion"; he calls aloud to his fellow-creatures "to abolish military force, but [ . . . ] first to bring all commanding officers who had done their duty, to trial by court-martial for that offence, and shoot them" (*MED*, ch. 6). Dickens modeled Honeythunder on the radical reform politician John Bright, member of the Jamaica Committee that



Figure 3: (Left) Rebellion Had Bad Luck: John Bull, "There, get out! Don't let me see your ugly face again for twenty years, and thank your stars you were stopped in time!" (*Punch*, 16 December 1865). (Right) The Jamaica Question: White Planter. "Am not *I* a man and a brother, too, Mr. Stiggins?" (*Punch*, 23 December 1865)

demanded Governor Eyre's trial for the killing of many black peasants and the hanging of George William Gordon, the instigator of the so-called rebellion. Meanwhile, Dickens supported the Eyre Defense Committee along with the more overtly racist Thomas Carlyle and John Ruskin.

In *Our Mutual Friend*, the lower middle-class clerk Reginald Wilfer describes black African kings as "cheap" and "nasty" (bk. 2, ch. 14) in the course of trying to prove to John Harmon the affectionate nature of his daughter Bella. This father is possessed by the centrip-

etal forces of colonialism, much like Mr. Meagles and his creator Dickens, both of whom are just within the confines of middle-class gentility. In that sense, and reflecting Dickens's own deep-seated aversion to middle-class women's extra-domestic activities, it is not surprising to find that Bella, who initially wishes to marry for mercenary motives and strays beyond the ideological boundaries of Victorian femininity, should be portrayed as finally growing in character until she is rehabilitated within the private sphere as an "Angel in the House."<sup>4</sup> The aggressive insularity, driven by a profound



Figure 4: "We hope by this time next year to have from a hundred and fifty to two hundred healthy families cultivating coffee and educating the natives of Borrioboola-Gha, on the left bank of the Niger." Illustrated by Fred Barnard (Household Edition, *BH*, ch. 4).

uneasiness when confronted with otherness, would necessitate the enforcement of gender boundaries along with the racial. Indeed the two are conflated in the satirical presentation of Mrs. Jellyby (Figure 4), a telescopic philanthropist who, ignoring her very large family, “could see nothing nearer than Africa” (*BH*, ch. 4). By the time of *Bleak House*, as Grace Moore puts it, “Dickens’s frustration with the policy of domestic *laissez-faire*—in his view a euphemism for downright negligence—had become so overwhelming that he could only envisage the British nation as Mrs. Jellyby’s home, and the dispossessed as analogous to her disregarded children.”<sup>5</sup> Through Mrs. Jellyby, Dickens argues that the love of humanity, whether philanthropy or charity, should first be practiced at home.

The sense of charity with which Dickens is often identified does appear to have gradually waned through his later works, where his discourse is imbued with elements of anti-feminism and racism. Ironically, then, although he could be rather liberal about the definition and confinement of madness, Dickens was eventually less progressive concerning the marginalization of both women and colonized people as inferiors. Ultimately,

while a sense of Christian charity was personified, especially in his earlier works, through memorable characters such as Mr. Pickwick and the reformed Scrooge, it seems not to have been a sentiment he would extend to all people for all time; it was a benevolence hedged with limitations and exceptions.

<sup>1</sup> Maria K. Bachman, “‘Furious Passions of the Celtic Race’: Ireland, Madness and Wilkie Collins’s *Blind Love*,” *Victorian Crime, Madness and Sensation*, ed. Andrew Maunder and Grace Moore (Aldershot: Ashgate, 2004) 179.

<sup>2</sup> Sabine Clemm, *Dickens, Journalism, and Nationhood: Mapping the World in Household Words* (New York: Routledge, 2009) 82.

<sup>3</sup> Lillian Nayder, *Unequal Partners: Charles Dickens, Wilkie Collins, and Victorian Authorship* (Ithaca: Cornell UP, 2002) 100–01.

<sup>4</sup> Mrs. Wilfer visits Bella and John in their new home and leads the way through the whole of the interior decorations in an arctic mood, “with the bearing of a Savage Chief, who would feel himself compromised by manifesting the slightest token of surprise or admiration” (*OMF*, bk. 4, ch. 16). The middle classes in Victorian Britain and the savage chiefs abroad are accepted as being close enough with their emphasis on the values of respectability.

<sup>5</sup> Grace Moore, *Dickens and Empire: Discourses of Class, Race and Colonialism in the Works of Charles Dickens* (Aldershot: Ashgate, 2004) 36.



## ディケンズ作品全 20 冊，三回目読了雑感

After Reading Twenty Volumes of Dickens' Works for the Third Time

清水 英秋

Hideaki SHIMIZU



僕は 2003 年に都立高校を定年退職しました。年々激しくなつてゆく校務の多忙化と部活の濃密化の中で、僕の心は「勉強したい」と激しく叫んでいました。37 年間の教職経験のなかで底辺校勤務が多く、自分の勉強はおろそかになっていました。英文の活字に飢えていました。退職とともに「学生に戻ろう」と決心しました。本棚にほこりをかぶって学生時代に読み残した本を片端から読み進みました。主にアメリカ文学です。40 年も前のペーパーバックです。40 年もの紙質疲労で一枚一枚はがれていくような状態ですが、丁寧に辞書を引いて読み進みました。50 数冊読んだところで、「さて」と本棚をざっと見渡すと故問<sup>はざま</sup>二郎先生翻訳の『我らが共通の友』（ちくま文庫・全 3 巻）が目飛び込んできました。問先生は僕の高校の恩師です。先生がこの本を出版なさった時に寄贈してくれたものです。僕は懐かしくて嬉しくて、すぐに丸善に飛んで行きました。翌日から僕の孤独で厳しいディケンズ修行が始まりました。文体の重厚さや難解さはディケンズと同時代人のアメリカの作家メルビル（『白鯨』）やホーソン（『緋文字』）で知っていましたが、圧倒的なボリューム（ペンギンクラシックスで約 800 頁）と多人数の登場人物が複雑に絡み合つて最後の大団円までもつてゆくとい

うミステリー仕立ての構成には全く驚かされました。読後感は爽快で、最後まで読みきつたという達成感で一杯でした。早速、問先生に読書報告を送りました。先生からは‘A bolt from the blue! which gratefully shocked me’ と返事があり、「ここしばらくは *TTC* の ‘buried deep’ の心境でしたがなにやら ‘dug up’ の思いあり」と続けていました。また「*OMF* については“読んで”もらえた事を嬉しく思います。ディケンズとともに訳者として感謝します。全巻（まして原文で）読み通す人は、手に入れた人のせいぜい十分の一くらいかと思っただけです。すから」ともありました。この言葉が嬉しくてこの後次々と読み進む原動力になったと思います。

問先生は僕の高校時代に、授業の合間にディケンズに関する色々な話をしてくれました。その中で一番印象に残っているのはコーヒールームの話です。「店に入ってな、内側からガラス窓を見るとき見えるだろう（と言って黒板に大きく ‘MOORE EFFOC’ と逆文字を書く）。ディケンズはこれを見てぞっとするような不思議な感覚を味わっていたんだ。僕はこの話の出所を知りたくて、コーヒールームの場面になるとドキドキしながら読んだものでした。しかし数多くのこの場面がありながら、この出所には遭遇できませんでした。



1回目読みが終わって、『ディケンズとともに』（小池滋著・晶文社）を読んで、これはフォースターの『チャールズ・ディケンズ伝』の中の記述だと分かり、胸のつかえが下りました。

6冊目の『骨董屋』の読後感で「最後に老人ではなくネルを死なせてしまった作者がうらめしいです」と書き送ったところ、「ネルの死を悲しがってくれるのは、1842年港でディケンズの米到着を待っていた当時のアメリカ人と同じですね」という返事がありました。僕は、これは『アメリカン・ノーツ』に載っているに違いないと思い、わくわくして同書を読みました（15冊目）。しかし、見つきりませんでした。これも伝記の中の記述でしょうか。

先生のこういう返信もありました。「あなたが30～40の世代をしっかりと読み込むことに使っていたら、おそらく……と惜しい気もしますが、研究職ならぬ教育職の人生を歩んだのも……」。僕は自分の高校教師としての37年間の人生を決して後悔はしていません。むしろ他の人の数倍は働いてきたと自負さえています。しかし、この「しっかりと読み込む」という言葉は僕の心に深く残りました。そこで僕は自分を「辞書引き職人」と規定して、10冊目の『ニコラス・ニッケルビー』と11冊目の『ボズのスケッチ集』で単語ノート作りをして、僕自身のための‘DICKENS GLOSSARY’（第1集）を作り上げました。続いて16冊目の『マーチン・チャズルウイット』と17冊目の『ドンビー父子』で第2集を、そして残り第3集を作り上げ、最後にその合本を約60ページにまとめあげました。付録として「仕事の種類」、「馬車の種類」、「ゲーム」、「植物名」、「動物名」、「アルコール飲料」を採集し

ました。

「仕事」は163種類採集、頻度数の順に10個挙げると、‘chandler’（雑貨商、ろうそく製造販売業）、‘huckster’（呼び売り商人、行商人）、‘costermonger’（果物・野菜などの呼び売り商人）、‘haberdasher’（紳士用装身具商、小間物商）、‘hatter’（帽子製造人、帽子屋）、‘milliner’（婦人用帽子屋）、‘lamplighter’（街灯点灯夫）、‘carter’（荷馬車屋）、‘pieman’（パイ売り）、‘wheelwright’（車大工、車両製造人）などです。

「馬車」は23種類採集、10個挙げると、‘chariot’（2頭立て4輪軽馬車）、‘phaeton’（2頭立て幌付き4輪馬車）、‘cabriolet’（1頭立て2輪折りたたみ式馬車）、‘gig’（1頭立て2輪軽馬車）、‘barouche’（2頭立て幌付き4人乗り4輪馬車）、‘fly’（1頭立て有蓋軽馬車）、‘hansom cab’（1頭立て2輪軽馬車）、‘chaise’（1頭立て2輪軽馬車）、‘omnibus’（3頭立て乗合馬車22人乗り）、‘brougham’（1頭立て4輪箱馬車・御者台が外にある）などです。

「ゲーム」は35種類採集、10個挙げると、‘skittle’（木製の円盤または球を投げて、9本のピンを倒す）、‘whist’（2人1組の4人でやるトランプ遊び）、‘backgammon’（西洋すごろく、2人でする盤上ゲーム）、‘cribbage’（2～4人で行い、各競技者が捨てた2枚の札を親が自分の持ち札にできるトランプゲーム）、‘blind man’s buff’（目隠し遊び）、‘billiard’（ビリヤード）、‘bagatelle’（盤上で行う玉突きの一種）、‘leapfrog’（馬跳び）、‘rubber’（トランプの三番勝負）、‘piquet’（2人用のトランプゲーム）などです。

「植物」は116種類採集、10個挙げると、‘bramble’（イバラ、野バラ）、‘honeysuckle’（‘woodbine’；スイカズラ）、‘buttercup’（キンポウゲ）、‘fig tree’（イチジク）、‘geranium’（ゼラニ

ウム), 'ash' (トネリコ), 'mignonette' (モクセイソウ), 'nettle' (イラクサ), 'thistle' (アザミ), 'yew tree' (イチイ) などです。

「動物」は 94 種類, 10 個挙げると, 'magpie' (カササギ), 'partridge' (ヤマウズラ), 'hedgehog' ('porcupine'; ヤマアラシ, ハリネズミ), 'dormouse' (ヤマネ), 'blackbird' (クロウタドリ), 'goldfinch' (ゴシキヒワ), 'linnet' (ムネアカヒワ), 'lynx' (オオヤマネコ), 'pheasant' (キジ), 'sparrow' (スズメ) などです。

「アルコール」は 30 種類, 10 個挙げると, 'grog' (ラム酒の水割り), 'brandy and water' (ブランデーの水割), 'negus' (ぶどう酒に湯と砂糖とレモンと香料を加えた飲料), 'gin and water' (ジンの水割り), 'claret' (ポルドー産の赤ぶどう酒), 'Madeira' (ポルトガル領マデイラ島産の薄色のデザートワイン), 'porter' (焦がした麦芽を使った黒ビール), 'shrub' (果汁・砂糖などにアルコールを加えた酸味のある飲料), 'flip' (ビール・ブランデーに鶏卵・香料・砂糖など加えて暖めた飲料), 'julep' (ウイスキーなどに砂糖・ハッカ・氷を入れた酒) などでした。

僕から問先生への最後の読書報告は 2007 年 8 月末でした。その手紙の中で僕はディケンズ・フェロウシップに入会出来た事を、喜びを込めて報告しました。そして「なりたての若造のディケンジアンから尊敬する大御所のディケンジアンへ」と結びました。奥様が大声で病床の先生に読んであげると先生は嬉しそうにしていたとお手紙をいただきました。9 月初めに大型の台風が日本列島を縦断しました。先生の魂はその台風に乗って懐かしい仙台に帰ったのだと僕は思いました。先生には沢山学びたいことがあった。一緒に酒を飲ん

で肩を叩きながら大声でディケンズを語りたかった。このショックで僕の 2 回目読み (今度は発行年代順に読むことにしました) は、張り合いがなくなって、気が入らなくて、「難しいな、難しいな……」の気持ちばかりを引きずって、1 回目読みの時よりも大幅に時間がかかりました。

さて、全 20 冊を三回読み通して、いくつか気がついた事があります。その一つは人名の読み方の難しさです。恥ずかしい話ですが、ロマン・ポランスキーの映画『オリバー・ツイスト』を見たとき、ロンドンのスリの親玉をフェイギンと呼んでいるのをみて、僕はハッとしました。僕は二回も読んでいながらファギンと発音していたのです。BBC 製作の『荒涼館』をテレビで見たとき、エスターの後見人はジャーディスではなくてジャーダイスと発音されていました。『ニコラス・ニッケルビー』読後の問先生への読書報告で「Madeline の発音を僕はメイドリンと読んでいましたが、ニッケルビー夫人が間違えて Magdalen と発音したのを考えるとマドラインと読むのかなとも思いました。どうでしょう」と教えを乞いました。先生からは「エブリマンの発音辞典によると (マドリリン, マデリン, マデライン)。マデライン (2005 年, 田辺訳) くらいがいいところかと思います」との返事でした。『ディケンズ鑑賞大事典』の付録 CD-ROM では『互いの友』の登場人物をボズナップと記述し、問二郎訳の『我らが共通の友』でもボズナップと記述されていますが、『大事典』の作品解説ではボドスナップとなっています。カシオの電子辞書ではパドスナップ (『リーダーズ英和辞典』, 研究社) です。『大事典』の作品解説が正しいかなと思います。人名ではありませんが、『デイヴィド・

コッパフィールド』(13章)でデイヴィッドがドーヴァーの大叔母を頼ってとぼとぼ歩いてゆく場面があります。デイヴィッドは古着屋で自分の‘waistcoat’(ベスト)を売ろうと交渉します。古着屋のおやじはこれを‘weskit’と発音します。僕はウェイトコウトと丁寧発音していましたが、当時はウェスキットまたはウェスカットぐらいが一般的な(少なくとも一般民衆の間では)発音だったのでしょね。

またいくつか間違いも発見しました。カシオの電子辞書の『ジーニアス英和大辞典』(大修館)には「artful dodger 策士・世渡り上手 (Charles Dickens の *David Copperfield* (1849) 中の作中人物から)」とあります。これは明らかな間違いです。*Oliver Twist* (1839) とすべきです。また『ディケンズ鑑賞大事典』の付録 CD-ROM の『バーナビー・ラッジ』の「あらすじ」の項で「ジョーゼフ・ウィレット ..... アメリカ独立戦争で左足を失し」とありますが、ジョーが失ったのは左足でなく片腕でした。また「あらすじ」に「ジョー・ウィレットは、恋人の間を行き来するのはやめるようにと言って息子の自由に干渉するようになった父を拒否するようになる。その一方でジョーは自分のことでも悩みを抱えていた。彼はドリーの近くにいたいがため、鍵屋に徒弟として [働いて] いたが、ヴァーデン夫人によってドリーとの仲を引き裂かれ、失望し、軍隊に入り、アメリカで反逆者たちと戦うため出かけると宣言する」とありますが、ジョーは鍵屋の徒弟にはなっていませんし、ヴァーデン夫人は二人の仲を引き裂くという積極的な行為はしていません。『ディケンズ鑑賞大事典』の作品解説の『アメリカ紀行』(157頁)には次のようにあります。「西

部からの帰路は、シンシナティーまで戻り、そこから馬車でオハイオ州コロンバスを抜け、エリー湖へ向かった。途中オハイオ州北部の奥深い森で馬を替えるため小休止したディケンズは、そこにいた2人の娘も自分の作品を読んでいたことを知らされ、感銘を受ける。ディケンズの名声は辺境の一軒家にまで及んでいたのである」。実際は、奥深い森のインディアン村で一泊したあと、ディケンズはサンダスキーからバッファロー行き蒸気船に乗り込む。その蒸気船の中で、一人の紳士が妻に話しかけるのを部屋の間仕切りを通して聞いたのである。「ねえお前、ボズは今もなおこの船に乗っているんだよ」。『ボズはまもなく本を書くだろう。我々みんなの名前を出してね』ということで、2人の娘から直接聞いた話ではなかったのです。同じく『大事典』の付録 CD-ROM のあらすじの項の『デイヴィッド・コッパフィールド』から、「ミコーバー氏は一家を引き連れてオーストラリアへと船出する。同行するのはペゴティー氏とその姪エムリー (ステアフォースに捨てられて長い苦難の末、悲嘆と後悔の身を伯父の手に委ねた)、連れ合いパーキスを失った妹のペゴティー、その他。船は赤い夕日の水平線に消え、ケントの山々とデイヴィッドの身辺を包む。」同行したのは妹のペゴティーではなくてガミッジ夫人 (Mrs Gummidge) でした。

第3ラウンドを読み始めた時、「学生に戻る」と決心した以上徹底してやれと思って、単語カード作りを始めました。およそ800枚のカードを4つの山に分けて、毎日一山づつめくっています。「受験生みたい」と自分で笑いつつ、69歳の化石頭でもまだ新しい単語が覚えられる事に感激しています。

2005年8月に読み始め、全20冊第3ラウンドを読み終わったのが2011年8月、丸6年かかりました。最初は肩を張ってうんうん言いながら自分を叱咤激励し、体力と根性だけで読み進みましたが、今は少しは面白さ楽しさを楽しみじみ味わう余裕も出てきました。

『オリバー・ツイスト』の中で、オリヴァーが二人のスリの先輩と初めての「仕事」に出て、見つかってひたすら逃げるあの場面が忘れられません。ディケンズ自身が声を上げて、ドンドン逃げる足音、群集の中をドンドン追いかける足音を短文でたたみかける、そのさまが目に見えるようでした。‘“Stop thief! Stop thief!” There is a magic in the sound. The tradesman leaves his counter, and the carman his wagon; the butcher throws down his tray; the baker his basket’ こんな調子で丸々1ページも続くのです。

『デイヴィッド・コッパフィールド』のヤーマス海岸の大嵐の場面の圧倒的な迫力(筆力)は忘れられません。嵐の海岸でスペイン船が難破しかかっている。沈みかかった船のマストに人がしがみついている。海の男たちも手が出せない。ハムがロープを体に巻いて荒れ狂う海に飛び込む。波に翻弄され、大波にのまれ、マストの男とハムが海岸に叩きつけられる。二人とも死んでいる。(なんとマストの男はステリアフォースだった。ハムの婚約者エムリーを強引に連れ去った男だ。可哀相なハム。男らしく勇ましいハム。)

『マーチン・チャズルウィット』のジョーナスの森の中での殺人場面と工作をしておいた自分の部屋に帰り着くまでの心の葛藤、この心理描写

のドキドキ感は恐ろしいまでの迫力がありました。

『荒涼館』の中で、バケット警部とエスターが雪の中を馬車でエスターの本当の母であるデッドロック夫人を追跡する。必ず探し出すという警部の強い意志と「生きていてください」というエスターの切ない願いが合わさって、読者の心を揺さぶります。この場面は2回目、3回目と読んでも文面から目が離せませんでした。

『バーナビー・ラッジ』と『二都物語』の群集の暴力破壊場面も物凄い迫力で忘れられません。

『ドンビー父子』で息子を失くしたドンビー氏が傷心の旅に出る、その列車の単調なゴトンゴトンという音が音楽的な印象で耳に残る。思わず「鉄道唱歌」を口ずさみたくなる文章です。カーカーが夜突然の轟音に驚いて外に飛び出すと機関車の動く音だった。その機関車にひき殺されるカーカー。今度は機関車の轟音は「死」の象徴でした。

最後に『互いの友』の最初の場面です。テムズ川でリジー・ヘクサムが船を漕いでいる。父が暗い水面をじっとくいているように見つめている。この暗い静寂の場面が物語の開幕にふさわしいと思い、とても気に入っている場面です。

僕は研究者でなく、物語を楽しく読むのが好きな一介のディッケンズファンですが、ディケンズに出会えて本当によかったと、今しみじみと思っています。

(‘DICKENS GLOSSARY’作成の苦労話は『年報』第30号に載せました。あわせてお読みください。)

# 2010 年度秋季総会

Annual General Meeting of the Japan Branch 2010  
at Tokyo Woman's Christian University, *Tokyo*

日時：平成 22 年 10 月 23 日（土）  
会場：東京女子大学 24 号館 3 階 24301 教室

Digital photography by Mitsuharu Matsuoka and Yuji Miyamaru



2010 年度の秋季総会は 10 月 23 日（土）、東京女子大学（東京都杉並区善福寺）にて開催されました。参加者は約 50 名。今回行われた 4 件の研究発表はいずれも若手の方々によるもので、そのうち大学院博士課程前期（マスター）の方が 2 名という、大変清新な顔ぶれでした。しかも、いずれ劣らぬレベルの高いものばかり。生气あふれる発表に刺激されたフロアの反応も活発。日本支部の未来を明るく照らすものだったと言えます。





## 研究発表 第 1 部 Papers

福島佳子（関西学院大学大学院）  
 「A Christmas Carol における「光」と「闇」  
 —Phantasmagoric illusion による「光」への誘導」

若澤佑典（東京大学大学院）  
 「ディケンズ作品における中国」



福島氏はスクルージの改心の過程を Phantasmagoria effect による「闇（孤独）から光（人間の輪）への移行」として捉え、実際の Phantasmagoria の光学的効果を細かく解説しつつ、『クリスマス・キャロル』のテキストを丹念に分析された。スクルージがいわば見世物によって改心へと導かれているという指摘には説得力があり、聴衆はこの作品が映画化されることの多い理由を改めて理解したと思う。普段なら論理的思考で心に鎧をまとい、何を見せられても「くだらん！」と切り捨ててしまふようなスクルージが、Phantasmagoria のように眼前に次々と繰り広げられる光景に感情を揺り動かされ、心を開いていく。福島氏が提示された、スクルージの「（論理的思考に裏打ちされた）監視網」を感情の奔流が突き破っていくプロセスには、Hard Times の fact と fancy の対立を想起させるものがあり、他のディケンズ作品の理解にもつながるものと思われた。

若澤氏は、ディケンズ（1840 年代後半～50 年代の雑誌記事と『ドンビー父子』、『リトル・ドリット』、『エドウィン・ドルードの謎』）における中国のイメージの変遷を綿密に検証された。元々は「停滞」を意味していた中国が「進歩への歩みを止めた」イギリスの姿と重なり合い、蔑みの対象から恐怖の対象へと変わっていくこと、また、中国の物品が消費生活の中に入り込んでくると、イギリスは中国を自らの内に取り込みつつもその浸食を阻もうとしていくこと、などの興味深い論点が良く整理された形で提示された。若澤氏が鮮やかに炙り出してみせたのは、既に自らの奥深くに抱え込んでしまった中国との間の境界線を引きなおし、中国との間のヒエラルキーを再構築しようとするヴィクトリア朝イギリスの姿である。しかも、若澤氏はそれがディケンズ作品の細部に具体的に表現されている箇所を見事に指摘された。示唆に富む、実に刺激的な内容だった。

いずれの発表後の質疑応答も質が高く、時間が限られているのが惜まれるほど充実していた。（松本靖彦）





*A Christmas Carol* における「光」と「闇」—Phantasmagoric illusion による「光」への誘導

福島佳子

*A Christmas Carol* には、ヴィクトリア朝時代に大流行した光学的見世物 Phantasmagoria の光学的要素が多数内包されている。Dickens が作品内で Phantasmagoria のモチーフを使用することは *The Old Curiosity Shop* や *Little Dorrit* にも見られるが、しかしながら本作では、モチーフにとどまらず、Phantasmagoria の技術までもが活用されている。Scrooge の改心のメカニズムが Phantasmagoria の光学的性質を帯びた「光」と「闇」の働きかけによって可能となっているのである。幽霊を用いた光学的幻影によって見る側の視点・思考を操作し、何らかの精神的効果を引き出す Phantasmagoria の手法が Scrooge の改心の土台となっている。本発表では、実際に Scrooge の

改心過程を順に見ていき、Dickens がいかに巧みに Phantasmagoria の光学的技術を駆使し Scrooge を改心へと導かれているのかを考察した。



「ディケンズ作品における中国」

若澤佑典

本発表においては、『ドンビー父子』、『リトル・ドリット』および『エドウィン・ドルードの謎』の三作品を取り上げ、ディケンズの作品における中国の表象について論じた。中国は貿易や消費という活動を媒介として、物語の地理空間の中でどのように位置づけられているのか。テキストの余白に位置づけられていた中国が、イギリスの内部へと侵犯していく過程を描出した。『ドンビー父子』においては、中国貿易に携わる商人となったウォルター・ゲイと、フローレンスとの家族形成について論じた。『リトル・ドリット』においては、中国貿易を営んできたクレナム家と、アーサー・クレナムの抱える不安を考察の対象とした。『エドウィン・ドルードの謎』においては、アヘン窟の空間と、アヘンの吸引を通じて変質するジャスパーの身体に焦点を当てた。

『ドンビー父子』から『エドウィン・ドルードの謎』に到る流れの中で、それまで不可視の存在であった中国が、可視化



されていく様子を見出すことができる。『ドンビー父子』において具体的なイメージを持たず、間接的に言及されるだけだった中国は、『リトル・ドリット』においては「無変化」や「感染」といった徴候によって、『エドウィン・ドルードの謎』においては、アヘンや身体的特徴といった物質的なレベルでテキスト内部の世界に表れるようになる。また、中国の存在が可視化

され、イギリスの内部へと侵犯していくにつれ、イギリスと中国の間で保られていた中心と周縁の安定した関係も、揺らぎを見せるようになった。ディケンズの作品における中国は、テキストの余白に位置づけられた周縁的な存在から、物語世界の中心であるロンドンを侵食していく存在へと変化していくのである。

## 研究発表 第2部 Papers

司 会：玉井史絵（同志社大学教授）

木島菜葉子（京都大学大学院博士課程後期）

「ディケンズとラスキン——風景が意味するもの」

小宮彩加（明治大学准教授）

「Soyer's Symposium」



私が司会を務めた2本の研究発表は、いずれもこれまであまり論じられることのなかったテーマを取り上げた、刺激に満ちた発表だった。まず、「ディケンズとラスキン——風景が意味するもの」で木島菜葉子氏は、ラスキンが賞賛したディケンズの3つの風景描写を出発点として、ディケンズの美意識を探っていった。「絵画的」と称されるディケンズの小説だが、風景描写を具体的に検証した試みは今まであまりない。木島氏の研究はそのような批評の空白を埋めるものであり、今後の更なる発展を期待させるものであった。次の発表「Soyer's Symposium」では、小宮彩加氏が、万国博覧会で当時のセレブリティ・シェフ、ソワイエが開いた“Soyer's Universal Symposium of All Nations”というレストランを、当時の様々な文献を駆使しながら紹介した。多くの画像をパワーポイントで示しながらの発表で、聴衆はさながらこのレストランを訪れたかのような感覚にとらわれた。レストランという一つの事象を通して見えるヴィクトリア朝中期の文化を鋭く分析した、興味深い内容であった。

## ディケンズとラスキン — 風景が意味するもの

木島菜菜子

ラスキンは父親に宛てた手紙の中で、ディケンズの小説の中から特に3つの場面を挙げてその描写力を高く評価した。本論はこの3場面を比較検討することで、ディケンズの描写の特徴と、ディケンズとラスキンの風景に関する美意識を再考察することを試みた。

ラスキンが評価した3場面は、*Martin Chuzzlewit* で Tigg が Jonas に暗殺される直前の日没、*Dombey and Son* において Edith に裏切られた Carker が Mr Dombey から逃亡する道のり、そして *David Copperfield* で Steerforth と Ham が難破する嵐の描写である。いずれの場面においても、視点人物が設定され、風景が死を暗示させ、日の光や嵐の海という自然の力に人間の脆弱さが対比させられている。特に David の強い不安を投影した嵐の描写は、ラスキンが *Modern Painters* 第3巻の中で定義した“pathetic fallacy”と考えられる。ラスキンは“pathetic fallacy”の安易な多用を批判しているが、「感情に任せず、真実を描いている」として評価しているものもある。*Modern Painters* におけるその分析は、ディケンズが *David Copperfield*



で行った海の描写に当てはまる。

一方でこれらの風景描写にはピクチャレスクの美意識の影響も見られ、既存の風景の見方に独自の倫理意識と観察眼から挑戦しようとしながらも、ディケンズもやはりピクチャレスクに強く影響されていたことが

伺えると結論付けた。

## Soyer's Symposium

小宮彩加

1851年5月10日。この日、第1回ロンドン万国博覧会が開かれていたハイド・パーク近くのレストランで、都市衛生協会 (Metropolitan Sanitary Association) の資金調達のための晩餐会が開催されていた。協会員であったディケンズも晩餐会に出席し、乾杯のスピーチをしていた。この晩餐会の会場となったのは、“Soyer's Universal Symposium of All Nations”。これは、ヴ

イクトリア朝を代表するセレブリティ・シェフ、アレクシス・ソアイエが万国博覧会の開催に合わせて建てた巨大レストランであった。晩餐会はこのレストランのオープニングを飾る記念すべきディナー・パーティであり、新聞各紙でメニューが紹



介されるほど注目を集めたイベントだったのである。

“Soyer’s Symposium” は、マジック・ランタンや水銀ガラス球、酒の湧き出る噴水など、斬新で奇抜な仕掛けがたくさん施されたアミューズメント・レストランだった。時代を先取りしたこのレストランの壁画を担当したのは、のちにディケンズに気に入られて *Household Words* にも執筆するようになったジョージ・オーガスタス・サラだった。サラはレストランに住み込みで

壁のパノラマ画を仕上げ、さらに改装工事中から訪れていた見学者に配るためのレストランの絵入り冊子を作成した。

発表では、サラの冊子や当時の新聞・雑誌記事をもとに、“Soyer’s Symposium” がどのようなレストランだったかを明らかにし、なぜこのレストランが約5ヶ月で閉店せざるをえなくなったのか、その理由を考察した。

研究発表ではフロアからの発言が相次ぎ、活発な質疑応答となった。



## 懇 親 会

総会終了後は、タクシーに分乗して吉祥寺第一ホテルに移動。40名で懇親会が行われ、楽しい食事と歓談のひとときを過ごしました。

二次会は第一ホテル裏の居酒屋「蔵」。16名が参加し、大いに盛り上がり、ふと気づくと11時を過ぎていました。

昨年と同じパターンで、二次会から参加の原田範行氏（東京女子大学）に率いられ、常連ハードコアの皆さんは吉祥寺の何処かでの三次会へと流れていったようです。（原英一）





# 2011 年度春季大会

The Japan Branch Spring Conference 2011

at Kobe College, *Kobe*

日時：平成 23 年 6 月 4 日（土）

会場：神戸女学院大学 エミリー・ブラウン記念館 2 階 202 号室

Digital photography by Mitsuharu Matsuoka and Yuji Miyamaru

2011 年の春季大会は、6 月 4 日（土）に、緑豊かな森の中にある神戸女学院大学の美しいキャンパスで開催されました。梅雨に入りましたが、幸い天候に恵まれ、南欧の建物を思わせる瀟洒な会場エミリー・ブラウン記念館には 60 名ほどが集いました。研究発表はありませんでしたが、二つの意義深い講演が行われ、さらにプロの俳優によるディケンズ作品朗読という画期的なプログラムも生まれ、実に内容豊かな大会となりました。会場をご提供くださり、裏方の雑務をこなしてくださった上に、講演の司会もお引き受けいただいた溝口薫氏に深く感謝申し上げます。（原英一）





## 特別講演

司 会：佐々木徹（京都大学教授）

Dr John Drew (University of Buckingham)

‘Charles Dickens’s Weekly Magazines (1850-70) and the  
“Business of Leisure” ’

John Drew 氏の講演はたいへん熱のこもったもので、興行主である小生としては大満足。会員の皆さまにも喜んでいただけたと自負しています。氏は、帰国して Dickens Journals Online のサイトをチェックすると、日本からのアクセスがたくさんあったと嬉しそうに報告してくれました。また、日本でデモンストレーションがうまくいかなかったコンピュータの声（Amy と Brian）による朗読は、7月に行われた Research Society for Victorian Periodicals の学会では成功裡に終わり、聴衆は人間の声と間違えたそうです（ほんまかいな）。とにかく来年3月には HW と AYR がオンラインで利用できるようになるとのこと。皆さま、乞うご期待。

(佐々木徹)



## DICKENS JOURNALS ONLINE

ジョン・ドルー氏は現在、ディケンズのジャーナリズム全てをデジタル化するという大規模なプロジェクトをバッキンガム大学を拠点として推進しています。技術の進歩によってテキストのスキャンニングの精度はかなり上がりましたが、学術資料として十分に価値あるものとするためには、エラー修正が欠かせません。膨大な電子化資料の修正には多数のボランティアの協力が必要です。意欲ある日本のディケンジアンはぜひドルー氏のサイトを訪問し、登録して、このプロジェクトに参加してください。詳細は次の場所にて、<http://www.buckingham.ac.uk/djo>

ディケンズ長編全訳刊行記念公演 司会 溝口 薫

田辺洋子 (広島経済大学教授) Yoko Tanabe  
「翻訳をめぐる」 “On Translating Dickens”



田辺洋子氏は、本年刊行の『大いなる遺産』(溪水社)をもって『ピックウィック』から『エドウィン・ドルード』までのディケンズ全長編小説の個人全訳を完成された。氏は講演で、十数年間にわたる翻訳作業のさまざまなエピソードを紹介。聴衆は、氏の飾らないユーモア溢れる語り口に魅了されると同時に、前人未踏の偉業を達成された氏の迫力、重みに感じ入った。

### 講話雑感

田辺 洋子

遙か十七年前の真夏のとある日、一念発起して『互いの友』を訳し始めたのはいいが、わずか一日で音を上げそうになった。空しく迎えた灰色のどんよりとした日没がつい昨日のこのように思い出される。

それがこの度、出発点に劣らず大好きな『大いなる遺産』で一先ず長編全訳のフィナーレを飾ることが出来、感無量であると同時にほっと胸を撫で下ろしている。ややもすれば自己の作業にのみ目を向けがちだが、顧みれば何と幾多の方々に支えられて来たことか。奇しき出会いや貴重な助言の恩恵に与らねば、到底この険しい道程は踏み越えられなかったろう。長い連鎖の個人の環などちっげなものだ。

記念講演の後で質問を受けた。「分からない英語があった時はどうするんですか？」イタイ所を突かれた。こんなことを言っても信じてもらえないかもしれないが、考えあぐねたらふっと神様が救いの手を差し延べてくれた(ような気がした)ことは一再ならずある。必ずや、でないのはまだまだ「修行」が足りないということか。



講演の締め括りには司会者から翻訳の「姿勢」のようなものを問われた。こちらも咄嗟には答えられなかったが、常々語り手も含め個々の登場人物の声(ないし言葉)で「語ろう」と努めてはいる。果たしてこれまで何人の声音を使い分けて来たことか。目眩く思いがしないでもない。

最後に、皆様へ祝福して頂いたこの節目を機に初心に立ち返り、なお研鑽を積みたい。月並みではあるが、好きこそ物の上手なれ。



### 第3部 特別公演 ディケンズ作品朗読

司 会：梅宮創造（早稲田大教授）

佐藤 昇（俳優・グローブ文芸朗読会主宰）

「ドクター・マリゴールド」

A Reading of 'Doctor Marigold' by Noboru Sato

佐藤昇さんはシェイクスピア劇に始まる新旧かずかずの舞台を経てこられたが、この十年来、ディケンズの朗読に没頭して独自のドラマティック・リーディングを完成させた。ディケンズ朗読台本二十一篇のうち未読のものは四篇を残すのみという。ディケンズ自身が朗読を断念した五篇も含めて、佐藤さんは全部読み切ろうと考えているようだ。たいへんな情熱家である。このたび誉れ高きフェロウシップの会場で、好きな演目の一つ「ドクター・マリゴールド」を読むことになって、叩き売りマリゴールド君にもまして“胸がいっぱい”との由である。

### メモリアルの朗読会

佐藤 昇

ディケンズ公開朗読台本のなかで、最も好きな「ドクター・マリゴールド」を、ディケンズ・フェロウシップ日本支部、2011 年春季大会で朗読させて頂きましたことは大変な喜びでございました。

私はいつも、ディケンズは、どのような気持ち、どのようなプレス、どのようなイメージを持って公開朗読をしたのだろうかと思うとき、人間としてのロマンを感じてしまうのです。

ディケンズを様々な角度から研究なされている会員の皆様のまえて、私なりの解釈での朗読でしたが、ディケンズ公開朗読台本に巡り会えたことは、俳優としても、とても素敵な出逢いを頂戴したと、感謝いたしております。

公開朗読台本に限らず、ディケンズ作品を多くの人々に知っていただくためにも活動を続けてまいりたいと考えております。



## 田辺洋子氏出版祝賀会

Evening Party in Honour of Dr Yoko Tanabe

於 愛蓮門戸店



松本靖彦氏から記念品を贈呈

の贈呈が行われた後、支部長から祝辞を呈し、乾杯となりました。例によって和気あいあいの喧噪の中、美食を楽しんで一段落というところで、来賓からのご祝辞がありました。広島経済大学学長の前川功一氏と溪水社社長の木村逸司氏から、私たちの知らない田辺氏の人となりの一端を紹介されつつ、お心のコもったお祝いのお言葉をいただきました。

全長編の翻訳は完成しましたが、田辺氏の訳業は未だ終わってはいません。ディケンズの作品は長編以外の代表的なものだけでも、『クリスマス・ボックス』に『クリスマス・ストーリーズ』があります。少なくとも「ディケンズ小説個人全訳」が完成するまでは田辺氏は走り続けることでしょう。リトル・ドリットを思わせる小柄で痩身の田辺氏のどこにあのエネルギーが備わ

大会終了後、参加者一同は、「ドクター・マリゴールド」の感動を反芻しつつ、門戸厄神駅前の懇親会場へ向かいました。参加者は、ジョン・ドルー氏と佐藤昇氏も含め、40名超で、盛会となりました。

今回の懇親会は「田辺洋子氏出版祝賀会」として、ディケンズの全長編小説の個人訳を完成された田辺洋子氏の偉業を讃える会としました。司会をお引き受けいただいた西條隆雄氏は、立派なプログラムを印刷してくださいました。田辺氏へ花束と記念品



(左から) 植木研介氏、木村逸司氏、田辺洋子氏、松村昌家氏、前川功一氏

っているのでしょう。松村昌家氏は、祝辞の中で、「今年一年は休め」と言われましたが、ご命令とはいえ、田辺氏は従わないでしょう。

※実際、2011年12月に田辺氏は、『クリスマス・ストーリーズ』（溪水社）を出版されました。830ページという大冊です。ずっしりと重いクリスマス・プレゼントでした。

恒例の二次会は西宮北口駅近くの「天花」に場所を移して行われました。こちらの参加者はドルー氏ほか16名。歓談はいつ果てるともなく続きました。

(原 英一)



田辺氏の偉業の陰の立て役者は、御母堂です。残念ながら祝賀会にはご参加いただけませんが、後で田辺氏からお写真をお送りいただきました。



懇親会スナップ





# ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約

## Rules, Japan Branch of the Dickens Fellowship

制定 1970 年 11 月 12 日  
改正 2000 年 6 月 10 日  
改正 2005 年 12 月 1 日

### 第 I 章 総則

- 第 1 条 (名称) 本支部をディケンズ・フェロウシップ日本支部と称する。
- 第 2 条 (会員) 本支部は在ロンドンのディケンズ・フェロウシップ本部の規約に則り、日本に住み、チャールズ・ディケンズの人と作品を愛する人々を以って組織する。
- 第 3 条 (所在地) 本支部は支部事務局を原則として支部長の所属する研究機関に置く。
- (2) 支部事務局とは別に、財務事務局を、財務理事の所属する研究機関に置くことができる。
  - (3) 本支部の所在地の詳細については付則に定める。

### 第 II 章 目的および事業

- 第 4 条 (目的) 本支部はディケンズ研究の推進とともに支部会員相互の交流・親睦をはかることを目的とする。
- 第 5 条 (事業) 本支部は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
1. 全国大会および研究会の開催。
  2. 機関誌の発行。
  3. ロンドン本部および諸外国の各支部と連絡を密にして相互の理解と便宜をはかること。
  4. その他、本支部の目的を達成するために必要と認められる事業。

### 第 III 章 役員

- 第 6 条 (役員) 本支部に次の役員を置く。
- 支部長 1 名、副支部長 1 名、監事 1 名、財務理事 1 名、理事 若干名。
- 第 7 条 (役員の職務) 支部長は理事会を構成し、支部の運営にあたる。
- (2) 副支部長は支部長を補佐する。
  - (3) 監事は本支部の会計を監査し、理事会および総会に報告する。
  - (4) 財務理事は、本支部の財務を管理する。
- 第 8 条 (役員の選出および任期) 役員を選出は、理事会の推薦に基づき、総会においてこれを選出する。
- (2) 役員は任期は 3 年とし、連続 2 期 6 年を越えて留任しない。
  - (3) 財務理事の任期は支部長の在任期間とする。
  - (4) 役員に事故がある場合は補充することができる。その場合、補充者の任期は前任者の残任期間とする。

### 第 IV 章 会議

- 第 9 条 (議決機関) 本支部には議決機関として総会、臨時総会、理事会を置く。
- 第 10 条 (総会) 総会は本支部の最高議決機関であり、支部長がこれを招集する。
- (2) 総会は、役員を選出、事業の方針、予算、決算、規約の変更など、支部運営の重要事項を審議する。
  - (3) 総会の議決は出席会員の過半数による。
  - (4) 総会は原則として年に 1 回開催する。臨時総会は必要に応じて開催する。



第 11 条 (理事会) 理事会は本支部の執行機関として支部長が随時これを招集し、本支部の目的達成上必要な事項を審議する。

### 第V章 会計

第 12 条 (経費) 本支部の経費は、会費、寄附金、その他の収入を以ってこれにあてる。

第 13 条 (会費) 会員は、本支部の運営のため、別に定める会費を負担する。

第 14 条 (会計報告および監査) 本支部の会計報告ならびに監査報告は、毎年 1 回、総会で行う。

第 15 条 (会計年度) 本支部の会計年度は 10 月 1 日より翌年 9 月 30 日までとする。

### 付則

(1) 本支部の支部長、副支部長、監事および財務理事は次の会員とする。

支部長	佐々木 徹
副支部長	新野 緑
監事	青木 健
財務理事	玉井史絵

(2) 本支部の事務局は、京都市左京区吉田本町 27 番 1 号、京都大学大学院文学研究科佐々木徹研究室に置く。

(3) 本支部の財務事務局は、京都府京田辺市多々羅都谷 同志社大学 京田辺校地 香柏館高層棟研究室 713 玉井史絵研究室に置く。

(4) 本支部役員の氏名、住所、所属研究機関に異動があったときは、この付則にある該当事項は、総会の議を経ることなく、変更されるものとする。

(5) この規約は 2005 (平成 17) 年 12 月 1 日から適用する。

\* \* \* \*

※ 会員にはロンドン本部機関紙 (*The Dickensian*) (年 3 回発行) および支部『年報』(年 1 回発行) を送ります。

※ 会費の支払いは、郵便振替でお願いいたします。(振替番号 00130-5-96592)



第 34 号投稿論文の審査結果

応募論文数 2 採用数 0

投稿論文審査担当理事

金山 亮太 佐々木 徹 武井 暁子

田中 孝信 玉井 史絵 梅 正行

中村 隆 原 英一 山本 史郎 松本 靖彦

## 『年報』への投稿について

※2012年より変更がありますので、ご注意ください。

### 論文投稿規定

- (a) 論文は日本語、英語いずれも可（英文の場合は事前にネイティヴ・スピーカーによるチェックを受けてください）。
- (b) 論文の長さは、原則として、日本語の場合は14,000字（400字詰原稿用紙換算35枚）以内、英語の場合は7,000語以内とします。
- (c) 論文原稿の締切は6月10日（必着）。理事の審査（採・否・再提出）をへて受理・掲載します。
- (d) 論文原稿は、原則として電子メールにより添付ファイルとして、副支部長宛に提出してください。（アドレスは[mla@mla.ac.jp](mailto:mla@mla.ac.jp)です。）  
電子メールが利用できない場合には、清書原稿3部（コピー）を副支部長宛送付してください。

### 論文の書式について

- (1) 書式の細部については、原則として、*MHRA Style Guide* (<http://www.mhra.org.uk/Publications/Books/StyleGuide/download.shtml>), または *MLA Handbook* の第6版 (<http://www.mla.org/style>) に従ってください。最終的な書式形式は編集で統一します。
- (2) 注については、脚註ではなく、尾注を用いて下さい。
- (3) 文献表については、引用した文献を、論文の末尾に付けて下さい。
- (4) 日本語論文で欧米人名を「サッカー」などと日本語表記する場合には「サッカー (William Makepeace Thackeray)」とカッコ内に原語を表記してください。
- (5) ディケンズの著作・登場人物名については、日本語表記する場合でも、原語を示す必要はありません。示す場合は、上記(4)に従って一貫して表記してください。
- (6) 数字については原則としてアラビア数字としてください。（例：「一九世紀→19世紀」、一八一二年→1812年」。ただし、「一人や二人」や「一度や二度」などは例外とします。）章分けにはローマ数字を用いることができます。

### 論文以外の随筆、書評、ニュース等

- (1) 締切は8月10日です。原則として電子メールにより、添付ファイルを副支部長宛に送付してください。電子メールが利用できない場合は、清書原稿1部を送付してください。
- (2) 書式については、論文とは異なり、原則として著者の自由です。ただし、数字表記については論文と同様アラビア数字とします。
- (3) 長さは自由。ただし、原則として、最長でも8,000字（400字詰原稿用紙換算20枚）を超えないようにしてください。写真の添付も自由です。写真は可能なかぎりデジタル・データをご提供ください。
- (4) 編集上の都合により採用できない場合もあります。また、編集担当者の責任で内容を大幅に編集する場合があります。あらかじめご了承ください。

※ 論文・一般記事等を問わず、すべての原稿に「英文タイトル」と「著者名のローマ字表記」を必ず付記してください。

フェロウシップ会員の執筆業績  
 Publications by Members of the Japan Branch  
 (2010 ~ 2011)

著書・編書・共著

- 新井潤美, 「イギリスにおける日本文学—ステレオタイプの功罪」, 『越境する言の葉—世界と出会う日本文学』, 彩流社, 2011年
- 新井潤美, 『執事とメイドの裏表—イギリス文化における使用人のイメージ』, 白水社, 2011年
- 金山亮太, 『サヴォイ・オペラへの招待—サムライ, ゲイシャを生んだもの』, 新潟日報事業社, 2011年
- [佐々木徹] Sasaki, Toru (共著), 'Major Twentieth-Century Critical Responses', *Charles Dickens in Context*, ed. by Sally Ledger and Holly Furneaux (Cambridge: Cambridge University Press, 2011), pp. 51–58
- [佐々木徹] Sasaki, Toru (共著), 'Modern Screen Adaptations', *Charles Dickens in Context*, ed. by Sally Ledger and Holly Furneaux (Cambridge: Cambridge University Press, 2011), pp. 67–73
- 島田桂子, 『ディケンズ文学の闇と光—〈悪〉を照らし出す〈光〉に魅入られた人の物語』, 彩流社, 2010年
- [寺内孝] Terauchi, Takashi, *Charles Dickens: His Last 13 Years*, ブックコム, 2011年
- 梅正行 (共著), 「ジャンルの多元性と詩的言語の領分」, 『多元を生きる』, 勁草書房, 2011年, 87–92頁 ([http://toshoshimbun.jp/books\\_newspaper/dokusyia\\_display.php?toukouno=166](http://toshoshimbun.jp/books_newspaper/dokusyia_display.php?toukouno=166))
- 梅正行 (共編著), 「いつのまにか非近代にのみこまれる近代について」, 橋本楨矩／梅正行共編, 『現代インドの英語小説—グローバリズムを超えて』, 鳳出版, 2011年, 164–83頁
- 富山太佳夫 (共著), 「ディケンズをどう読むか—「やさしさ」としての〈社会改良〉」, 向井英忠／近藤存志編, 『ヴィクトリア朝の〈文芸〉と〈社会改良〉』, 音羽書房鶴見書店, 2011年
- 原英一 (共著), 「19世紀前半—ディケンズの時代」, 河内恵子／松田隆美編, 『ロンドン物語—メトロポリスを巡るイギリス文学の700年』, 慶應義塾大学出版会, 2011年, 99–126頁.
- 廣野由美子, 『一人称小説とは何か—異界の「私」の物語』, Minerva 歴史・文化ライブラリー 19, ミネルヴァ書房, 2011年

- 船場弘章 [福井昌章], 『こんにちは, デイケンズ先生』, 近代文藝社, 2011 年
- 堀正広, 『例題で学ぶ英語コロケーション』, 研究社, 2011 年
- 松村昌家, 『文豪たちの情と性へのまなざし—逍遙・漱石・谷崎と英文学』, ミネルヴァ書房, 2011 年 2 月
- 向井英忠 (共編著), 「三つのユートピア小説に描かれた〈社会改良〉—ブルワー＝リットン卿, サミュエル・バトラー, そしてウィリアムモリス」, 向井英忠/近藤存志編, 『ヴィクトリア朝の〈文芸〉と〈社会改良〉』, 音羽書房鶴見書店, 2011 年
- 向井英忠 (共編著), 「オスカー・ワイルドが夢見た世界—童話「幸福な王子」に託した〈社会改良〉」, 向井英忠/近藤存志編, 『ヴィクトリア朝の〈文芸〉と〈社会改良〉』, 音羽書房鶴見書店, 2011 年
- 山本史郎, 『名作英文学を読み直す』, 講談社, 2011 年
- 吉田一穂 (共著), 「デイケンズによる奴隷制度批判と南北戦争前後のアメリカ」, 『英米文学と戦争の断層』, 入子文子編, 関西大学出版局, 2011 年, 115-37 頁
- [吉田朱美] Yoshida, Akemi (共著), 'A Comparative Reading of Mona Caird's *The Wing of Azrael* (1889) and Thomas Hardy's *Tess of the D'Urbervilles* (1891)', *Representations of Murderous Women in Literature, Theatre, and Television*, ed. by Juli Parker, Edwin Mellen, 2010, pp. 33-57

## 論文

- 青木健, 「この御し難き人間の業 (1) —デイケンズと出版者たちの闘争」, 『成城文芸』, 第 213 号 (2010 年 12 月)
- [市川千恵子] Ichikawa, Chieko, 'Writing as Female National and Imperial Responsibility: Florence Nightingale's Scheme for Social and Cultural Reforms in England and India', *Victorian Literature and Culture*, 39.1 (2011): 87-105
- 市川千恵子, 「〈癒し〉の表象とジェンダー・ロールの変遷—エリザベス・ギヤスケルの『ルース』から〈新しい女〉小説へ」, 『ギヤスケル論集』, 第 21 号 (2011 年), 17-29 頁
- 梅宮創造, 「明治期のデイケンズ翻訳」, 『比較文学年誌』 (早稲田大学), 第 47 号 (2011 年 3 月), 1-20 頁
- 猪熊恵子, 「『自伝』自伝作家を描きだす試み」, 『英米文学』 (立教大学), 第 71 号 (2011 年), 17-34 頁
- [木島葉菜子] Konoshima, Nanako, 'The Picturesque and Reality in *Pictures from Italy*', 『JBBDF』, 第 33 号 (2010 年), 19-37 頁
- 齋藤九一, 「トロロブ『自伝』研究—実作者による小説講義の 3 章」, 『白山英米文学』 (東洋大学) 第 36 号 (2011 年 2 月), 39-46 頁

- 佐々木徹,「推理小説の伝統とフォークナー」,『フォークナー』,第13号(2011年), 22-45頁
- 田中孝信,「『妻たちと娘たち』における姉妹の絆」,『人文研究』(大阪市立大学大学院文学研究科),第62巻(2011年),45-58頁
- 谷綾子,「『荒涼館』—腐敗の打破と新たな秩序を創造する力」,『JBBDF』,第33号(2010年),38-51頁
- [玉井史絵] Tamai, Fumie, 'Educating Oliver: The Conflicting Ideas of Education in *Oliver Twist*', 『JBBDF』, 第33号(2010年), 4-18頁
- 田村真奈美,「『荒涼館』における慈善」,『JBBDF』,第33号(2010年),38-51頁
- 永岡規伊子,「チャールズ・ディケンズ『主イエスの生涯』に表れたキリスト教観」,『キリスト教文藝』(日本キリスト教文学会関西支部),第二十七輯(2011年6月),1-17頁
- [畑田美緒] Hatada, Mio, 'Anxieties about Victorian Gender Ideology: A Study of Dickens's *Oliver Twist* and *The Old Curiosity Shop*', 『大阪大学世界言語研究センター論集』,第3号(2010年),37-52頁
- 原英一,「徒弟制度とジョージ・リロのロンドン商人」,『日本ジョンソン協会年報』,第35号(2011年),24-28頁
- 廣野由美子,「ギヤスケルとエリオット—『ルース』と『アダム・ビード』に見られる作家の道徳的姿勢」,『ギヤスケル論集』,第21号(2011年),61-73頁
- 松村昌家,「作家たちのパブリック・スクール」,『甲南英文学』(甲南英文学会),第26号,2011年7月,1-19頁
- 水野隆之,「『オリヴァー・トゥイスト』における語り手とオリヴァーの関係について」,『Fortuna』(欧米言語文化学会),第22号(2011年),21-31頁
- 三宅敦子,「家具をめぐる覇権争い—*The Odd Women* と *In the Year of Jubilee* に表象されるジェンダーの揺らぎ」,『日本ヴィクトリア朝文化研究』,第8号(2010年),1-15頁
- [矢次綾] Yatsugi, Aya, 'Gaskell's Historical Novels: Reactions to the Period', *Gaskell Journal*, 24 (2010): 115-27
- 吉田一穂,「ディケンズと精神的外傷」,『近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)』,第1巻第2号(2011年),153-66頁
- 吉田一穂,「*Vanity Fair*—ベッキー・シャープの人物描写と時代の肖像としての作品の性格」,『英米評論』(桃山学院大学総合研究所),第25号(2011年),19-36頁

## 翻訳

- 梅宮創造 (訳), チャールズ・ディケンズ, 『ディケンズ公開朗読台本』, 英光社, 2010年
- 梅宮創造 (訳), チャールズ・ディケンズ, 「ホレイショー・スパーキンズ氏の正体」(朗読), 2011年2月
- 岸田京子 (共訳), アナ・K・ナード, 『ミルトンと対話するジョージ・エリオット』, 英宝社, 2011年
- 木村晶子 (共訳), アナ・K・ナード, 『ミルトンと対話するジョージ・エリオット』, 英宝社, 2011年
- 佐々木徹 (訳), チャールズ・ディケンズ, 『大いなる遺産』, 上下巻, 河出文庫, 河出書房新社, 2011年
- 篠田昭夫 (訳), チャールズ・ディケンズ, 『クリスマス・ストーリーズ』, 溪水社, 2011年
- 田辺洋子 (訳), チャールズ・ディケンズ, 『大いなる遺産』, 溪水社, 2011年
- 田辺洋子 (訳), チャールズ・ディケンズ, 『クリスマス・ストーリーズ』, 溪水社, 2011年

## 解説

- 新井潤美, 「英国階級社会と『英国王のスピーチ』」, 『キネマ旬報』, 第1577号 (2011年3月), 72-73頁
- 田中孝信, 『スラム街小説—19世紀後半～20世紀初頭のロンドンの闇の奥, イースト・エンドの人々と生活』 (*Slum Fiction: Representations of Life in London's East End, 1880-1920*), 全7巻, アティーナ・プレス, 2011年
- 松村豊子, 『女性と職業—英国19世紀～20初頭文献集成』, ユーリカ・プレス, 2010年
- 松村昌家, 『日英博覧会 (1910年) —公式史料と関連文献集成』 (*The Japan-British Exhibition of 1910: A Collection of Official Guidebooks and Miscellaneous Publications*), 全6巻, ユーリカ・プレス, 2011年

## 書評

- 市川千恵子, 「Holly Furneaux, *Queer Dickens: Erotics, Families, Masculinities*」, 『JBBDF』, 第33号 (2010年), 74-80頁
- 植木研介, 「小林章夫 (著) 『エロティックな大英帝国—紳士アシュビーの秘密の生涯』」, 『JBBDF』, 第33号 (2010年), 93-95頁
- 加藤匠, 「Julia M. Wright, *Ireland, India and Nationalism in Nineteenth-Century Literature* (Cambridge University Press, 2007)」, 『日本ヴィクトリア朝文化研究』, 第8号 (2010年), 68-72頁



- 加藤匠, 「Chatherine Waters, *Commodity Culture in Dickens's Household Words: The Social Life of Goods*, Sabine Clemm, *Dickens, Journalism, and Nationhood: Mapping the World in Household Words*」, 『JBBDF』, 第33号(2010年), 85-91頁
- 金山亮太, 「Julia M. Wright, *Ireland, India and Nationalism in Nineteenth-Century Literature* (Cambridge University Press, 2007)」, 『日本ヴィクトリア朝文化研究』, 第8号(2010年), 83-86頁
- 金山亮太, 「チャールズ・ディケンズ(著), 伊藤弘之/下笠徳次/隈元貞広(訳)『イタリアのおもかげ』, 『JBBDF』, 第33号(2010年), 64-39頁
- 閑田朋子, 「Doug Underwood, *Journalism and the Novel: Truth and Fiction, 1700-2000* (Cambridge University Press, 2008); Dallas Liddle, *The Dynamics of Genre: Journalism and the Practice of Literature in Mid-Victorian Britain* (University of Virginia Press, 2009); Matthew Rubery, *The Novelty of Newspapers: Victorian Fiction after the Invention of the News* (Oxford University Press, 2009)」, 『日本ヴィクトリア朝文化研究』, 第8号(2010年), 53-57頁
- [佐々木徹] Sasaki, Toru, 'Charles Dickens, *Dombey and Son* (Audio Book) read by David Timson; *The Old Curiosity Shop* (Audio Book) read by Anton Lesser', *Dickensian*, 106.2 (2010): 161-62
- [佐々木徹] Sasaki, Toru, 'Charles Dickens, *Barnaby Rudge; Martin Chuzzlewit* (Audio Books) read by Sean Barrett', *Dickensian*, 107.1 (2011): 64-65
- 田村真奈美, 「Chris Louttit, *Dickens's Secular Godspel: Work, Gender, and Personality*」, 『JBBDF』, 第33号(2010年), 81-85頁
- 梅正行, 「ロイド・ジョーンズ(著), 大友りお(訳)『ミスター・ピップ』」, 『JBBDF』, 第33号(2010年), 91-93頁
- 梅正行, 「中野孝司訳ジェイン・オースティン作品全六巻(ちくま文庫)」, 「ネット読者書評欄」, 『図書新聞』, 2011年9月28日
- 梅正行, 「木村茂雄/山田雄三編, 『英語文学の越境』, 英宝社, 2010年」, 『WEB英語青年』, 2011年4月
- 梅正行, 「入子文子編, 『英米文学と戦争の断層』, 関西大学出版会, 2011年」, 『図書新聞』, 2011年4月16日
- 梅正行, 「富田成子, 『ジョージ・エリオットと出版文化』, 南雲堂, 2011年, および, アナ・K・ナード著, 辻裕子/森道子/村山 晴穂(訳), 『ミルトンと対話するジョージ・エリオット』, 英宝社, 2011年」, 『WEB英語青年』, 2011年7月
- 梅正行, 「常田夕美子, 『ポストコロニアルを生きる』, 世界思想社, 2011年」, 『図書新聞』, 2011年9月3日
- 梅正行, 「柴田元幸訳, 『ロード・ジム』, 河出書房新社, 2011年」, 『WEB英語青年』,

2011年10月

宮丸裕二, 「Michael Slater, *Charles Dickens*」, 『JBBDF』, 第33号(2010年), 70-73頁

エッセイ・その他

市川千恵子, 「海外研修を終えて」, 『JBBDF』, 第33号(2010年), 96-100頁

市川千恵子, 「過去と現在が混在する町ーブルームズベリー地区漫ろ歩き」, 『釧路新聞』, 2011年3月

市川千恵子, 「湖水地方とヴィクトリア朝文学」, 『ギヤスケル・ニューズレター』, 第23号(2011年), 9頁

梅宮創造, 「墓石とミュージカル」, 『英文学』(早稲田大学), 第97号(2011年3月), 24-26頁

梅宮創造, 「師弟」, 『早稲田現代文学研究』, 第1号(2011年3月), 43-46頁

梅宮創造, 「コーディネリアの唇」, 『融合文化研究』, 第16号(2011年4月), 30-31頁

小宮彩加, 「子連れでロンドン」, 『JBBDF』, 第33号(2010年), 109-117頁

宮丸裕二, 「第104回ディケンズ・フェロウシップ国際大会」, 『JBBDF』, 第33号(2010年), 118-31頁

渡部智也, 「レディング大学留学記」, 『JBBDF』, 第33号(2010年), 101-09頁

本誌『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』(*The Japan Branch Bulletin of the Dickens Fellowship*)を『JBBDF』と省略して表記しています。



ディケンズ・フェロウシップ日本支部

## お問い合わせ先

〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
京都大学文学研究科 佐々木徹研究室

URL: <http://www.dickens.jp>

email: < >

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動および会員について情報につきましては、上記のいずれかによりお問い合わせ下さい。

また、新規入会希望の方も随時お待ちしております。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

## 役員一覧

ディケンズ・フェロウシップ日本支部では「支部規約」に従い、2011年総会において選出された以下の役員および名誉職を以て、運営に当たっています。役員の任期は2011年10月より2014年9月までの3年間です。

名誉支部長	小池 滋	東京都立大学 名誉教授
支部長	佐々木 徹	京都大学大学院 文学研究科 教授
副支部長	新野 緑	神戸市外国語大学 外国語学部 教授
理事 (監事)	青木 健	成城大学文芸学部 教授
理事 (財務担当)	玉井 史絵	同志社大学 グローバル・コミュニケーション学部 教授
理事	要田 圭治	広島大学大学院 総合文化研究科 教授
理事	武井 暁子	中京大学 国際教養学部 教授
理事	田中 孝信	大阪市立大学大学院 文学研究科 教授
理事	榎 正行	中京大学 国際教養学部 教授
理事 (Net 担当)	松岡 光治	名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 教授
理事	松本 靖彦	東京理科大学 理工学部 准教授
VOD 担当補佐	梶山 秀雄	高根大学 外国語教育センター 准教授

## 編集後記

○3月11日の直後、イギリス、アメリカ、カナダ、そしてつい昨年地震で被害を受けたばかりのクライストチャーチからも、次々とお見舞いのメールが届きました。「私たちはあなたたちと共にいる」——この決まり文句がいかに励ましになるか、実感しました。世界中のディケンジアンに感謝です。

○今号には2本の投稿論文がありました。審査の結果、残念ながらいずれも不採用となりました。そのため論文は掲載されておりません。「ディケンズ生誕200年記念論文集」の方に多くの会員が力を傾注したためでしょうか。次号では刺激的な論考に出逢いたいものです。

○1999年発行の『会報』（当時）第22号以来、十年以上にわたって続けてきた編集の仕事も今回をもって終わりとなりました。宮丸裕二氏には「年報担当」として、面倒な仕事をこなしていただき、深く感謝したいと思います。

(原 英一)

○投稿論文と特別寄稿論文がなかった今号は例年に比べて薄くなりましたが、その分、書評をお送り下さった方々のお陰で雑誌の体裁を保つことができました。こうした雑誌の内容充実は一とえに大会と総会の活動内容の反映だろうと思いますので、今後の大会と総会への会員の積極的な参加や充実を編集担当の立場からも一層望むところです。

○清水先生がミセラニーで言及されているディケンズの登場人物の読みに関しまして、『鑑賞事典』付録の「登場人物事典」を執筆した責任から「ポズナップ」と記述している事情をこの場をお借りしてご説明致しますと、基本的に「ポズナップ」でも「バドスナップ」のいずれでも正しいということになると思います。「ポ」と「バ」はそれぞれ英米の発音の違いに集約され、'dz'を「ズ」とするか「ドズ」とするかは慣習定着の度合いと、再現性の精度と、表記法の好みとの問題になるからです。'Podsnap'という固有名詞そのものは一定の読みが定着するほどの慣習が未だ形成されていないため、日本で今日定着しているパーツの読み方を当てはめたかたちになります。一方、'Podsnap' ([pɒdsnæp]) という音を英語で発音しようとすると [s] の音はその前の [d] に引きずられる形で「同化」(assimilation) という作用が生じて母音化し、[s] が [z] という音で発音されることになります（あるいは [s] のままでは発音できなくなります）。[d] と [dz] の音をほとんど区別しない日本語の発音慣習の中では、例えば 'cards' [kɑ:rdz] を「カードズ」と書かず「カーズ」と書くように、ここでは [pɒdsnæp] を「ポドスナップ」ではなく、「ポズナップ」と表記した次第です。ちなみに、上記の「登場人物事典」は、編集技術上やむを得ずカタカナを用いて発音表記を行っているうえ、世界で初めての人物名の発音を掲載したディケンズ登場人物事典とあって、多くの英語辞書、固有名詞発音辞典を参照の上、英語を第一言語とするベテランのディケンジアンに何人も検証しながら作成されていますので、それなりに信用して頂いて構わないかと思うと同時に、別個にお気づきになりました点がありましたら、是非今後も皆々様からご教示賜りましたら有り難く存じます。

○今号を節目に私の編集、組版作業も一段落になるとのこと。こちらとしては多くの会員の方と接する機会が得られ、最新の文献事情や各会員のお仕事を知り、カメラの撮影と編集の技術などを知る機会となり大変勉強をさせていただきました。結果としていくらかでもフェロウシップへの貢献となっていることを願うばかりです。編集を担当させて頂いた期間にわたり、原稿の提供や校正、情報提供、写真提供と様々なかたちでご協力を頂き、編集の業務に温かいご理解を頂いた会員および非会員の方々に改めて御礼を申し上げます。

(宮丸 裕二)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報

第34号

発行 2011年12月20日

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院文学研究科 佐々木徹研究室内

印刷 株式会社 東北プリント